バカと俺たちと召喚獣

羅?

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
バカと俺たちと召喚獣

【Ｎコード】
Ｎ８５１６Ｎ

【作者名】
羅？

【あらすじ】
試験中に居眠りしてＦクラスになってしまった沢村　優也。
なんだかんだで色々なことに巻き込まれていきます。

作者の暇つぶしで書いております。
それでも良いという心優しい方はどうぞ

※更新周期が気まぐれでよく変わります

召喚戦争編　第一話

またこの季節がやってきた。桜の花が咲き誇るこの季節が。
今日、俺こと沢村優也は文月学園の２年生になる。
ついでに、クラス替えの発表も行われる。

文月学園は成績によってクラスを分ける学校だ。
ちなみにクラスによって設備の豪華さも異なる。
特に、ＡクラスとＦクラスとじゃあ天と地ほどの差があるらしい。
話を戻すが、その成績というのは学期末に行われるテストを中心材料として判断される。
んで、その結果が今日中に知らされる。

普通はドキドキはぁはぁしながら結果表を貰いに行くんだろうが、今の俺にそんなテンションの高いことはできない。何しろ結果が分かっているのだから。

「ＨＲまであと３０分、か」
携帯をポケットから取り出し、画面を開いてデジタルに表示された時間を確認する。

（行きたくなくても、遅刻とかはできないよな。先生に目を付けられるとめんどくさいことになるし）
今は苦しくても、いつかそれを打開できる好機が来る。
それまで粘り、耐え続ける――――それが俺のポリシー。

なんていう格好良さ気なことは絶対に俺の口からは出せないけれど。
それでも、そういうことに憧れたりしてしまうのは、やはり男の性なのではないだろうか。

俺の家は比較的文月学園に近く、徒歩１５分ほどで間に合う。
電車通学に一時間以上かける人もいる中、この通学時間はなかなか恵まれている方なのではないだろうか。
家を出てからそろそろ１０分くらいが経つ。あと5分くらいで学校に着くかな。

それからしばらく歩いていると、桜並木につつまれた文月学園が見えてくる。
風が吹くたびに舞い散る花びらはとても綺麗で、なんだか一年前のことを思い出してしまう。
「もう一年も経つんだな」
ここで見る全てのものが真新しく見えた、一年前の入学式。
ピカピカの校舎も、ここから見えた桜並木も、この学校で用いられているシステムも。
期待と不安で押しつぶされそうだった、ちっぽけな自分も懐かしい。

「……ああ、そうだな。これで今日の結果も最初から分かっているものじゃなければ、もう最高だったんだけど」
ここで文句を言っても仕方がないか。
今の俺にできることといえば、この現状を受け入れることくらいしかないのだから。

校門ではマッチョなボディビルダーが生徒に何かしらの封筒を配っていた。
おそらくクラス分けの結果表が入っているんだろう。

うん、封筒はこの際どうでもいいや。
それよりも重要なのはボディビルダーの方だ。
なぜこのタイミングでマッチョの男を雇って封筒を配らせる必要があるんだ？
学園の何かしらのパフォーマンスか？　としても何故マッチョなんだ？
まったく、朝から気持ちの悪いものを。
どうせならレースクイーンあたりに頼んでくれればよかったのに。
いやいや、それはいろんな意味で危ないな。しかし、マッチョはマッチョで世間の誤解を……。

「おはよう、沢村」
「は？」
黒人ボディビルダーだと思われた、そのマッチョの男は
生活指導の鬼『西村宗一』通称、鉄人だった。
よ、よりにもよって鉄人に封筒を配らせるなんて！
俺は高橋先生みたいな美人教師を期待してたのに！
せめてもの慰めに目の保養でもしようかと思ったのに！
「は？　じゃないだろ。西村先生だ！」
「あ……いえ、すみませんでした」
鉄人に逆らうわけにもいかないので、とりあえず謝っておく。
『地獄』と揶揄される生活指導室だけには絶対に行きたくない。
「それでいい。ほら、クラス分けの結果だ」
そういって茶色い封筒を渡してくる。

中身は確認せず、無造作に鞄に突っ込んだ。

「どういうことだ？　中身を確認しないのか？」
「結果なんて見なくてもわかりますよ……」
「だがクラスを間違ってもらっても困る。確認は絶対だ」

正直、面倒だが鉄人に逆らうと後で何を言われるかわかったもんじゃない。
ここは大人しく従っておくのが筋だ。
とりあえず、「はい」とだけ言って封筒を開く。
大仰な封筒に入っている割に、中身は小さかった。
（資源の無駄遣いだろ、これ。全校生徒にこんなモン配ってんのか）
折りたたまれた５ｃｍ四方の紙を無造作に開く。
中心にはデカデカと『Ｆ』の文字が書き入れられていた。

それを鉄人に見えるように、ひらひらと振る。

「まっ、そういうことなんで」
それだけ言って、校舎の下駄箱へ足を進めた。

＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊　＊

「すっげぇ……予想以上だ」
Ｆクラスに行く前にＡクラスの設備を一目見ておこうと新校舎に寄って覗いてみたが
システムデスク、リクライニングシート、個人エアコン、ドリンクバーｅｔｃ．．．。

至れり尽くせりだな。これが高校の設備だとはとても思えない。
Aクラスにちょっとした嫉妬を覚えながら、教室を出る。
連絡通路を通って旧校舎へ向かう。

（ま、Aクラスがあんな感じだったんだから、
いくら下位クラスでもそこまで設備が酷いことはないだろう。）

そんな楽観的思考を巡らせながら旧校舎の床を踏むが、その瞬間、
違和感が感じられた。
なんだ？　このさっきまでとは一変したボロい校舎は。

軽く不安を覚えつつ『F』と標示された教室に向かう。
入口に立って、そして入る。すると、素晴らしい光景が飛び込んで
きた。

歩くごとに軋む腐った畳に綿のないエコな座布団、夏には嬉しい
隙間風が舞い込むつぎはぎの窓、さらには足の折れかかった芸術的
な卓袱台。
わぁ……あらゆる面でエコだね。きっと資源の節約とか、
そういうものに気をつけているんだろうな～。

……ってふざけんな！　こんなところで勉強しろって言うのか？
てか、Aクラスとの差が激しすぎるわ！　俺の学費を返せっ！！！

はぁはぁ、柄にもなく熱くなりすぎた……。
ここで突っ立ってても何も始まらないな。とりあえず座ろう。
見たところ自由席みたいだし適当なところに座っておくとしよう。
ふと教卓の方を見てみると赤く、つんつんした髪が印象的な野性的
な生徒が立っていた。

目線が合った。
相手は少し驚いたような顔をして、そしてニヤリと笑った。
あいつと俺って知り合いだったっけ？

まあいいか、と勝手に自己完結し机に突っ伏し眠りについた。

「……ん？」
寝てからしばらく時間が立っているように思えたが実際それほどは進んでいなかったみたいだ。
まだ自己紹介が始まったばかりらしい。

「木下秀吉じゃ。演劇部に所属しておる」
瞳はぱっちりしていて、唇には潤いがあり、髪は肩にかかる程度の長さをしていて
深みのある茶色をしている。
要するに美少女だ。
こんな可憐な子がFクラスなんだから世の中わかんないな。
さっきまでの低いテンションもなんのその。魂に火がついた俺であった。

今こそ彼女に飛び掛かり、愛の告白を――――

『秀吉ーっ！　おれと付き合ってくれぇーっ！！』
『いや、俺とだ！』
『秀吉愛してるー！！！』

教室に響き渡る愛の告白。
みんながみんな、秀吉のまわりに集まる。
……まさか先手を取られるとは思わなかった。流石はFクラスって

ところか。

だが俺にもプライドってものがある。

むざむざ負けるわけにはいかないんだぁぁっ！

木下秀吉は俺のものだ、と秀吉を無視した取っ組み会いの輪の中に飛び込む。

蹴りと拳と賄賂が入り混じる戦場。

漢たちの熱いパトスが飛び散る中、俺は全力で急所攻撃を続けていく。

蹴りが飛んできたら受け止め、そのまま自分の足をねじ込む。

拳が来ればそれをしゃがんで避け、起き上がりざまに頭突きをかます。

賄賂は素直に受け取る。そして潰す。

パトス！　パトス！　パトス！

気付いた時には周りに敵はもう存在していなかった。

これで木下の周りはガラ空きだぜ！

沢村優也でダイレクトアタックゥゥッ――――

「ちなみに男なのでその辺を間違わぬようにの！」

――――な、なんだってー！！

俺の苦労は一体……。
戦利金の３０円で我慢しろというのか！
これじゃあ、うまい棒三本しか買えないじゃないか！
以後少し落ち着いた雰囲気で自己紹介が進んでいく。
うう……あんな可愛い子が男だなんて世も末だ。
この世に神はいるのか……？
「……土屋康太」
短っ！
「島田　美波です。海外育ちで日本語は会話はできるけど読み書きは苦手です。
あ、でも英語も苦手です。育ちはドイツだったので。趣味は吉井明久を殴る事です♪」
この人はレベル高い。スリムで貧乳、ポニーテール。
持ちステータスの数が半端じゃないな。
結構かわいいし。
でも趣味が果てしなくｄａｎｇｅｒだ。
俺の脳内で警報が鳴っている。
好きになった人を虐めるタイプだな、こりゃ。
吉井ってやつも大変だ。
それからしばらくは名前だけを言う単調な時間だけがすぎていく。
次に自己紹介する人は……この人か。ちょうど俺のとなりだね。

おっと、始まるな。

「え～っと、吉井明久です。気軽に『ダーリン』って呼んでくださいね♪」

『ダァァーリィーン！！』

男たちの野太い声の大合唱が始まった……。

俺はこの時、ジャイアンが自分の歌で瀕死にならない理由が初めて分かった。

他人に対しては殺人的な威力が発揮されるけど、自覚がないんだもんな。

「失礼・・・・・・忘れてください。とにかくよろしく」

言った本人は顔を引き攣らせている。

かなり辛そうだ。

そして俺の番が回ってくる。

「沢村　優也です。これから1年間よろしくお願いします」

下手に目立ちたくなかったので無難に攻めておいた。

つーか俺が自己紹介した瞬間、何故吉井が反応したんだ？

代表の件といい、わけわからん。

『ガラッ』

不意に扉が開く。

「あの、遅れてすみま、せん・・・・・・」

「えっ？」

教室全体から驚いたような声が上がる。

騒がしくなるクラスの中で担任（あれ、いつからいたのかな？）がその姿を見て話しかけた。

「丁度よかったです。今自己紹介をしているところなので姫路さんもお願いします」
「は、はい！　あの、姫路瑞希といいます。よろしくお願いします。」
「はいっ！　質問です！」
既に自己紹介を終えた男子生徒の一人が右手を挙げる。
「は、はい。なんですか？」
「なんでここにいるんですか？」
聞きようによっては不愉快な質問をする。
もっとも、これはクラスの連中の殆どが疑問に思っているはずだ。
実際俺も疑問に思っている。
彼女は学年次席並の実力の持ち主であって、本来ここに来るべき人じゃないからだ。
いろんな意味で。マジこのクラス変態のたまり場だから。
「その、振り分け試験の最中、高熱をだしてしまいまして・・・・・・」
なるほど。この学校で途中退席は認められていないからな。
彼女の理由を聞いて何を思いついたのか、クラスの皆がざわつき始める。
『そういえば、俺も熱（の問題）が出たせいでＦクラスに』
『ああ、化学だろ？　あれは難しかったな』
『俺は弟が事故に遭ったと聞いて、実力を出し切れなくて』
『黙れ１人っ子』

『前の番、彼女が寝かせてくれなくて』
『今年一番の大嘘をありがとう』

これは予想以上にバカばっかだ。

「それでは最後に坂本君お願いします」
先生が自己紹介を促す。
「はーいよっと」
教卓の前まで移動する坂本。

「Fクラス代表の坂本雄二だ。オレのことは代表とでも坂本とでも、好きなように呼んでくれ」
みんなが代表に注目する。

「さて、みんなに一つ聞きたい、カビ臭い教室・古く汚れた座布団・薄汚れた卓袱台・・・Aクラスは　冷暖房完備の上、座席はリクライニングシートらしいが・・・」

一呼吸開け、みんなの心に聞いた。
「・・・不満はないか？」

＜＜＜大ありじゃっっっ！？＞＞＞

二年F組全体の心の底からの叫びが廃屋に響いた。
あまりの振動に窓が揺れている。壊れないか心配だ。

まだ風が肌寒く感じる季節だ。
個人的に、割れるなら夏に割れてほしいものだと思っている。

「だろう？オレだってこの現状は大いに不満だ。代表として問題意識を抱いている。」

代表の言葉に不満が次々と出てくる。

＜いくら学費が安いからと言って、この設備はあんまりだ！　改善を要求する！＞

＜そもそもＡクラスだって同じ学費だろ？　あまりに差が大きすぎる！＞

「そこで代表としての提案だが、Ｆクラスは Ａクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けたいと思う！」

＜……ッ！？＞

これからひと騒動ありそうだ。

召喚戦争編　第一話（後書き）

小説書くのは初めてなので長い目で見てくれるとありがたいです。
ついでに評価や感想をつけていただけると嬉しいです。
というわけでよろしくお願いします。

召喚戦争編　第二話

「そこで代表としての提案だが、Ｆクラスは Ａクラスに対し『試験召喚戦争』を仕掛けたいと思う！」
代表の突然の発言に一瞬静まり返る教室。
だが直後、抑え込まれたエネルギーが一気に放出されるように反論が飛び出した。

『勝てるわけがねぇ』
『これ以上設備を落とされるなんていやだぁぁぁ！』
『姫路さんが居れば俺は何もいらない！』

俺も全く同意見だ。
姫路さんのことも含めて。

いつしか誰かもこう言っていただろう？　『巨乳はロマンだ！！』と。

冗談はさておき、

召喚戦争に勝てれば、戦争相手の設備を奪えるが
負ければ今の設備からワンランク下げられる。
もしＡクラスを下すことができれば、この廃屋からもおさらばできるが……

（このクラスのメンバーじゃあ正直無理だな）

召喚戦争。
あくまで『戦争』といっても所詮高校のシステムの一環だ。

範囲は校舎内で限られているし、地の利のようなものも全くない。
つまり相手との元々の戦力差が開いていた場合それをひっくり返せるだけの
トリックに使える材料が極端に少ない。
元々戦力が高い方が強くなる、ってことだな。

その状況で最下位クラスが最上位クラスに戦いを挑むのは
戦車にスタンガンで突撃するようなものである。

アホ以外の何物でもない。

（でもこれから一年間この設備でやっていくのもなんか癪だな）
どうせなら何か大きなことをやってみたいものだ。
文月学園の伝説になるくらいのことを。

「このクラスには召喚戦争で勝つことのできる要素が揃っている」
Ｆクラスが Ａクラスを華麗に倒す、という空虚な妄想に浸っていた俺を
この言葉が一気に現実に引き戻した。

（上位クラスに勝つことのできる要素？　揃っている？　どういうことだ？）

次々と浮かび上がる疑問符。好奇心をこんなにそそられたのは久しぶりだ。
クラスのざわめきもだんだんと大きくなっている。
いつの間にか代表にうまく乗せられていたようだ。

「それは今から説明してやる」
不敵な笑みを浮かべ、壇上から自分たちを見下ろす。
その姿には見事にクラスの代表としての威厳が伴っていたと思う。

「おい、康太。畳に顔をつけて姫路のスカートを覗いてないで前に出て来い」
威厳が台無しの第一声。思わずそっちの方を振り向いてしまう。

ミミズのような体勢をとりながら、必死にスカートの中身を覗こうとしている変態がそこにいた。
名前は確か……土屋康太、か。彼もなかなかのやり手のようだ。

「……！！（ブンブン）」
「は、はわっ」
低姿勢からの覗きこみの体勢を指摘され、手と顔を振り必死に否定する少年。
頬についた畳の痕を隠しながら前に出ていく。

「紹介しよう。こいつがかの有名なムッツリーニだ」
「……！（ブンブン）」

『おお……！』
ムッツリ―二という名に教室が揺れた。
その名は男子から畏怖と畏敬を、女子からは軽蔑をもってあげられる。
その正体は長らく謎とされていた。

「バカな、奴がそうだというのか！？」
「だが見ろ、いまだ必死に手で押さえて隠そうとしてるぞ？」

「ああ、ムッツリの名に恥じない姿だ」
もう既にバラされてしまったのだが、それでも必死に否定しようとしている土屋。
鼻血がたれてるその顔で否定されても説得力はない。

「姫路の事は説明するまでもないだろう。皆だってその力は知ってるはずだ」
「えっ？　わっ、私ですかっ！？」
「ああ、主戦力だ。期待している」
学年次席の実力を持っていると考えれば当然、か。

「そうだ！　俺たちには姫路さんがいるんだった！！」
「彼女ならＡクラスにもひけをとらない！」

だがそれでもまだ『次席』だ。
どうやったって『主席』には敵わない。

「そして秀吉もいる」
『おお……確かあいつ、木下優子の弟の……』
『しかも演劇部のホープでもあるらしいぞ』」

ふ、木下秀吉にもう未練はない。
新しいターゲットをもう見つけたから。

そう、木下優子というターゲットが。
木下秀吉が男ってことにはこの世の終わりを感じたが、
姉がいることを聞いて神がいることを確信した。

神様、ありがとう！

「当然俺も全力を尽くす」

『確かに何かやってくれそうな奴だ』
『坂本って、小学生の頃は神童とか呼ばれていなかったか？』
『ってことはここにAクラスレベルの奴が二人いるってことなのか！？』

へぇ……神童、ね。
道理でこんなに演説が上手いわけか。
いつの間にかクラス全員が代表に注目し、話に参加している。

つーか先生が空気……。
どことなく居心地が悪そうだ。

「いや、まだだ。まだ終わっていない」
そんな先生を尻目に演説はまだまだ続く。

『なんだと！？　他にだれかいるっていうのか？』
「ああ、そろそろ切り札の紹介をしようかと思う。沢村、前に出てこい」
「え？」

あれ？　この流れで俺登場なの？
一瞬、空耳か？　と思ったが

「お前のことだ。前に出てきてくれ」

指差しでご指名をいただきました。

どうやら空耳じゃなかったらしい。
というか、俺そんなに点数良くないんだけど？

「さて、こいつの名前は沢村優也っていうんだが……知っているやつは手を上げてみろ」
前に出てきた俺の肩を叩きながら皆に問いかける代表。

吉井明久って人が手を上げかけたが、すぐに引っ込めた。
……代表の眼力で。

結局、Ｆクラス内で手を挙げたのは一人もいなかった。
まあ当然か。１年の時は俺も特に目立つようなことはしてなかったし。

この結果に代表は満足そうに頷き、次の質問に移った。

「ふむふむ、では問おう。
“ロキ”の異名を持っている知っているやつはいるか？」

『“ロキ”だとぉっ！？』
クラスのほぼ全員が一瞬で反応した。

俺もびっくりした。
ここで“ロキ”の異名が出るとは思わなかったからだ。

ロキってのは北欧神話に出てくる悪戯好きの神の名前だ。
巨人と神の血を半分ずつ引いている。
並み外れた機知、機転や狡猾さを備えていて北欧神話のメインキャラ的な存在となっていて、
その生き様から『トリックスター』という別名も持っている。

そこから取って、1年前の事件を上手く解決へと導いた人物に皮肉と感謝の意を込めて送ったのが“ロキ”という異名だ。
しかし何故このタイミングでその名前を持ち出してきたのか？決まっている、俺はその答えがわからないほどバカじゃない。

「やはり皆、知っていたようだな」

この結果にも満足そうにうなずく代表。

「信じられないとは思うが、“ロキ”の正体、それは……」
やっぱりだ！　コイツ、俺を“ロキ”に仕立て上げようとしてやがる！

「おいちょっと待てふざけんな……ぐはっ！？」
なんとか力づくで止めようとしたが鳩尾に会心の一撃を食らい、その場に崩れる。

『続きを言ってくれ！　“ロキ”の正体は誰なんだ？』

なんで今教壇上で戦闘が行われたことに誰も突っ込まないんだよ……。

つーか先生！　なんであんたが無反応なの！？
一応教育者のはずだよね！？

「“ロキ”の正体、それは……こいつだ」

そう言って代表は無慈悲にも俺を指差した。

ああ……なんだか魔女狩りされてる人みたいな心境だ。
さよなら、俺の平和な学校生活……。

『えええええええ！？』
やめろ、やめてくれ！
リアクションなんてしないでくれ！

「みんな、信じられないとは思うがこれは全て本当のことだ」
お前も煽るなバカ代表！

「こいつには色んな場所で活躍してもらう」
『うおおおおお！』

ダメだ。もうこいつはクラスを煽ることしか考えてない！

やはり、ここは俺が何とかするしかないようだな！

「おい、お前ら！　ちょっと待つんだ」
『無敵のトリックスターがいればAクラスなんて目じゃねーぜ！！』
『そうさ、俺たちには“ロキ”がいるんだ！　負けるわけがない！』
「おい、ちょっと俺の話を……」
『システムデスクなんて手に入れたも同然だな！』
「俺の話を……」
『俺たちが最強だー！』
『オー！！』
「……」

結局、俺は“ロキ”という二つ名を被ることになった。

「……で、何をすればいいんだ？　期待されるほどの働きはできな

いと思うけどね」
「まあ、普通に働いてくれればいいさ。特別な時になったら連絡する」
「はいはい、了解」
「あー、沢村。一つだけ言っておく」
「なんだよ」

まだ何かあるのか、と不機嫌な表情を隠さずに答える。

「お前は“ロキ”であって“ロキ”じゃない。そのことを頭に入れておけ」
「??　わかった」
意味はよくわからなかったが、とりあえずその事は覚えておくことにした。
（“ロキ”であって“ロキ”じゃない……、か。何だそれ？）

場面は切り替わって、また演説の方に戻る。

「おい皆、まだこれで終わりじゃないぞ」
すでに浮かれているFクラスに更なる飴を与える。

『まだいるのかよ！？』
『おいおい、どうなってんだこのクラス！？』
『それは誰なんだ！？』
「それは……こいつだ！」
そういって一人の人物を指差す。

……吉井か。
さっきの『ダーリン事件』のこともあってすぐに名前は覚えたよ。
座布団に座りながらその様子を見守る。

「こいつの名前は吉井明久。“観察処分者”だ」

――――シーン……

さっきまでの盛り上がりが嘘のように消えた。

時計の秒針がカチカチと動く音だけが聞こえる。

「ちょっと雄二！どうしてそこで僕の名前を呼ぶのさ！全くそんな必要はないよね！」

吉井、心中お察しするぜ。

クラスの盛り上がり方は違うけど、公開処刑されていることには変わりないからな。

「……なぁ、観察処分者ってバカの代名詞じゃなかったっけ？」

クラスの誰かがそんな事を言い出す。その通りだけど。

ここでそれを言ってしまうのは、あまりに可哀想だと思う。

「違うよ！　ちょっとお茶目な１６歳に与えられる称号で…」

「そうだ、バカの代名詞だ！」

さらなる追い打ちをかける代表。血も涙もない。

「肯定すんなバカ雄二！」

「あの、それってどういうものなんですか？」

姫路さんが頭に疑問符を浮かべている。どうやら説明の必要がありそうだ。

「具体的には教師の雑用係だな。力仕事などの類の雑用を、特例として物に触れられるようになった召喚獣でこなすといった具合だ」

代表がそう解説する。召喚獣は本来は召喚獣以外の物に触れる事ができない。
最も学園の床には特殊な処理が施されて、立つことはできるらしい。

しかし観察処分者の召喚獣は何にでも触れる。

これだけ聞くと、観察処分者がとても素晴らしいもののように思えてしまうが、デメリットもある。
それは召喚獣の感覚の内の何割かが本人にフィードバックしてしまうのだ。

『つまり、おいそれと召喚できないヤツが一人いるってことだろ？』

「気にするな。どうせ、いてもいなくても同じような雑魚だ」
「雄二、そこは、僕をフォローする台詞を言うべきだよね？」
吉井、諦めるんだ。代表はそういう人だから。

「とにかくだ。俺たちの力の証明として、まずはＤクラスを征服しようと思う」
華麗なスルーが決まった。

「皆、この境遇は大いに不満だろう？」

『当然だ！！』

「ならば全員筆を執れ！出陣の準備だ！」
『おおーーっ！！』
「俺達に必要なのはちゃぶ台ではない！Ａクラスのシステムデスクだ！」
『うおおーーっ！！』
「お、おー…」
クラスの雰囲気に圧されたのか、姫路さんも小さく拳を挙げていた。
「それでは明久にはＤクラスへの宣戦布告の使者になってもらう。無事大役を果たせ！」
「……下位勢力の使者って大抵ひどい目に遭うよね？」
俺もそう思う。代表は吉井を生贄にするつもりなんだろうか？
「大丈夫だ。やつらがお前に危害を加えることはない。騙されたと思って行ってみろ」
「本当に？」
「大丈夫、俺を信じろ。俺は友人を騙すような真似をしない」
代表は今日、吉井を全く友人扱いしていない気がするが。
それ以前に本当に友達同士であることが疑わしいくらいだ。
「わかったよ。それなら使者は僕がやるよ」
「ああ、頼んだぞ」
君はもっと疑うことを知るべきだと思う。

「騙されたぁっ！」

案の定、吉井はボロボロになって帰ってきた。

召喚戦争編　第二話（後書き）

今回は少しテンポを意識して書いてみました。

召喚戦争編　第三話

「だまされたぁっ！」
そう叫びながら教室にこれが転がり込んでくる吉井。
「やはりそうきたか」
平然と言い切る代表。

「やはり、じゃないよ！　しっかり予想できてたんじゃないか！」
「もちろんだ。こんなことも予想できずに代表が務まるか」
コイツ最低だ。こうなることを予測できなかった吉井もバカだけど。

「大丈夫ですか？　吉井君」
唯一、姫路さんだけが心配して駆け寄る。

「あ、うん。大丈夫だよ。ほとんどかすり傷だし」
そう言って強がる吉井。
制服が破れるほどの傷はかすり傷には分類されないと思う。
かなり痛そうだ。

あれ？　さっきまでと全然反応が違うような……？
これって、もしかして恋ってやつか？

早速、確認をするのである。
一番彼のことを知ってそうな代表に。

「吉井って姫路さんのことが好きなのか？」
吉井達に聞こえないように軽く距離をとって、小声で話しかける。
「その通りだ。明久は姫路に惚れている。どっぷりとな。
召喚戦争を起こすことになったのは明久のせいでもあるのさ」

「どういうことなんだ？」
「曰く『姫路さんには彼女に相応しい教室で勉強してほしい』だそうだ
ま、ちょうど俺もその時に召喚戦争を起こすつもりだったからちょうどよかったんだけどな」

なるほど。姫路さんにどちらかというと虚弱体質って感じだからな。こんな廃屋で生活すると体が壊れると思ったんだろう。

「それで、なんで代表は召喚戦争を起こすつもりになったんだ？」
「ああ。『学力が全てじゃない』、そんなことを証明してみたくてな」
「ふーん。　『神童』とまで呼ばれたやつが、ねぇ？」
皮肉をこめて言葉を返す。さっきの仕返しと言わんばかりに。
「……」
どうやら答えるつもりはないようだ。
（ま、いっか）
一度こうなってしまうと、再び口を開かせるのは難しい。
さっさと諦めて、吉井たちの方へ戻る。

「吉井、本当に大丈夫？」
「平気だよ。心配してくれてありがとう」
「そう、よかった……。ウチが殴る余地はまだあるんだ……」
「ああっ！　もうダメ！　死にそう！」

……関わらないほうがよさそうだ。

「今はそんなことどうでもいいだろ？　さっさとミーティングに行くぞ」
騒ぎを一旦落ち着けて、代表がそんなことを言い出す。

「あれ、俺も行くの？」
その対象に俺も含まれていた気がしたので、一応聞き返す。

「当然だろ。お前が来なくてどうするんだ。
おそらくお前の働き次第でこの召喚戦争の結果が決まると言っていい――
かもしれない。それくらいの戦力だ」

「かもしれない……か。どうせなら、もっと持ち上げてほしかったんだけどなぁ」
「いや、もう充分すぎるほど持ち上げている。これ以上は無理だ」
「は？」
ちょっと待て。今のはどういうことだ！

「さて、無駄話はこれくらいにしてそろそろ行くぞ。時間は限られているからな。
康太！　秀吉！　行くぞ！　作戦会議を行う。屋上へ！」

「おい、代表！？」

召喚戦争編　第四話

――――屋上にて

「じゃあ作戦会議を始めようか。明久、時間はしっかり伝えたか？」
「あ、うん。今日の午後からって伝えといた。だから先にお昼御飯だね？」
「それなら今日くらいはまともな飯でも食えよ」
「そう思うならパンの一つでもおごってほしいんだけど？」

……ダメだ。この雰囲気で、この会話に割って入って『代表、さっきのことの意味を説明してもらおうか！』なんて言えない。

一旦その件は後回しにして、今は代表たちの輪に入ることにした。

「なあ……吉井って普段どんな食生活を送っているんだ？」
さっきの会話で感じた疑問点を素直に口に出してみる。

「いや、至って普通の食生活だよ？　最近はちょっと厳しい感じだけど」

「うーん、じゃあ今日の朝は何を食べてきたんだ？」
「贅沢に水と砂糖を食べてきたよ」

ひっでぇ食生活だ。それで生きていられるのが不思議でならない。
ビタミンとかどうするんだよ。

「もしかして吉井って借金持ち？」

「？」
頭に疑問符を浮かべる吉井。
「沢村、こいつは趣味にお金をつぎ込みすぎて食費を出す余裕も無くすほどの生活破綻者だ。
借金なんていう真っ当な理由じゃないぞ」
代わりに代表が答える。
「失礼な、僕は望んでこの生活をしているんだ。
しかも無駄なものを取らないという地球にやさしい清貧生活を……」
趣味に金をつぎ込んでいる時点で、とても清貧生活をしているとは思えない。
「必要なものまで削ってどうすんだよ……。あ、そうだ」
ポケットの中に手を突っ込んで中身をあさる。
確かポケットに……あった！
「これ、いる？」
取り出したのは一本のうまい棒。コーンスープ味だ。
ちなみに賞味期限は一週間前に過ぎている。
「これ、いる？」
そう言って、吉井のほうに放り投げる。
コーンスープ味のうまい棒が宙を飛ぶ。

「一応カロリーは高いから、エネルギーにはなるんじゃないか？」
「ありがとう！　まとまったカロリーを摂るのは久しぶりだよ！」
それを見事にキャッチし、袋を開けてがっつり中身を貪る吉井。
その様子をみて姫路は何かを決心したようだ。
吉井が姫路に惚れているということが発覚したのに伴って、
姫路は俺の射程範囲から出て行ったので『さん』付けはやめることにした。

「あ……あの、私がお弁当作ってきましょうか？」
おおっとぉ！　いきなりの爆弾発言。これは吉井、嬉しいな。
「ゑ？」
うんうん、好きな女子からのその提案ってそれくらい嬉しいものだもんね。
文字を間違えるくらい当然当然。

「ホントにいいの？」
改めて再確認する吉井。未だに弁当を作ってもらえることが信じられないようだ。
「はい、明日の昼でよければ」
「よかったじゃないか吉井。手作り弁当だぞ？」
「うん！」
「羨ましいな」
「うん！」
「……殺したいほど妬ましい」
殺気を包み隠さず放出する土屋もといムッツリーニ。
おそらく周りの空気が歪んで見えるのは気のせいではないだろう。

「うん！　……え？」
「……ふーん。瑞希って随分優しいんだね。吉井“だけに”作ってくるなんて」
あれあれ？　雲行きが怪しいぞ？
ムッツリーニはともかくとして、島田さんにまで牽制を入れられるなんて。

「あ、いえ！　その、皆さんにも……」
見事に牽制に引っ掛かる姫路。
「え？　俺達にも？　いいのか？」
「はい、嫌じゃなかったら」

普通に考えればこの提案はかなり都合がよいものだ。
朝に態々コンビニに寄る必要が無くなるから。
でも、

「俺はパスする」
だからこそそれに甘んじるわけにはいかない。
『え？』
「だって俺はまだ、このコミュニティに慣れてないし。
それにお前らとの交流もこれが初めてなんだから、そんなにお世話になるわけにはいかないだろ？」

嘘だ。完全な嘘っぱちだ。

沢村という男はそんな殊勝な人間ではない。
どちらかというと無遠慮な内に入るだろう。

中学の時に先生のおごりで部活仲間とラーメンを食べに行った時のことだ。

周りのみんなが安めの醤油ラーメンを頼んでいたなかで、
沢村だけがエビそばに半チャーハンと焼き餃子を頼んでいた。
そんなわけで沢村は普通、遠慮をしない。
ではなぜ姫路の料理を拒んだのか？
「そんなこと気にしなくていいよ。同じクラスの仲間じゃないか」
「そうですよ。私は大丈夫ですから」
吉井と姫路のフォローが入る。
「うーん、それは嬉しいんだけど……」
それでも拒み続ける俺。
「沢村、なんでそこまで遠慮してるんだ？」
「理由はいくつかあるんだけど……。強いて言えば吉井に悪いから、かな」
「ほう？」
「あいつって姫路のことが好きなんだよな？
だから今回、手作り弁当を作ってもらえることになったから
すっげえ嬉しかったんじゃないかと思うんだ」
言葉を一回切る。なるべくそれっぽい雰囲気が出せるように。
「でもその気持ちを裏切ることになってしまった。踏みにじることになってしまった。
俺はそんな、人の犠牲の上に成り立つようなメシは食べたくない」
「そうか……わかった。じゃあ姫路にはこちらのほうから話してお

こう」
そう言って、姫路と話を進めに行く代表。
……なんとか誤魔化しきれたようだ。
実は『姫路の弁当』を断ったメインの理由はそれではない。
確かに『吉井に悪いから』ということもあるけど。
まぁ、メインの理由と言っても大したことはない。
実際、『勘』だからだ。
（なんだか命が危ないような気がしたんだよな……）
勘、といってバカにしてはいけない。
沢村の勘は当たるときは無駄に当たる。
特にコインの裏表を１３回連続で当てたこと、じゃんけん３６人抜きは
中学で一種の伝説となっているくらいである。

「さて、話が逸れてしまったが本題に戻るとしよう」
「そうだ。代表、さっきから聞きたいことがあったんだが」
「なんだ？」
「これから召喚戦争を始めるわけだけど、なんで標的がＤクラスなんだ？
景気づけするならより安全に勝てるＥクラスを狙えばよかったと思うんだけど」
「確かに景気付けだけが狙いならそうしたさ。

だが、Aクラス攻略のプロセスの中でDクラスへの勝利は絶対に必要なんだ」
「どういうことだ？」
「それはこれから説明する。大まかなことから話を始めるか」

☆

カリカリ

よし、ここの問題の答えはこうっと。
「時間になりましたので筆記用具を置いてください」
よし！　ちょうどキリのいいところで終われた。

今、何をしているかって？　絶賛補充テストの真っ最中だねっ♪。

マジ帰りたい。

クラス分けテストの時に居眠りしちゃったから全科目受けなきゃならないんだよね。
しかもそれが全部終わらないと召喚戦争には参加できない。……辛い。

代表が言うには、
『Dクラス戦にお前の出る幕はほとんどないだろうから試験に集中してくれ』
ということらしい。大丈夫かな？
Dクラスといっても、Fクラスの連中の二倍近い点数を持っている

わけだし。

ガラッ

「邪魔するぞい」

「おっと木下たち、どうしたんだ？」

扉を開けて木下を筆頭として入ってきたのはＦクラスのみんなだ。

「消耗した点数の補充をしにきたのじゃ」

彼らはこの戦争の前線部隊だ。戦況を聞くのにはちょうどいいかもしれない。

「なあ、今のところはどんな感じだ？」

「う～む、五分五分といった感じじゃろうな」

「Ｄクラス相手にか！？」

姫路が戦線に入っていないのに戦況五分五分はすごいと思う。

「いや、もちろん正面からぶつかってるわけじゃないぞい。

下校中の生徒たちにまぎれて、複数対１で戦っておるのじゃ」

なるほど、そのために坂本は開戦を午後まで遅らせたわけか。

あとは点数補充を終わらせた姫路が下校中の生徒たちにまぎれてＤクラス代表に接近、

討ち取ればいいわけだな？　確かにこの分じゃ俺の出る幕はなさそうだ。

「ん？　ところで今の戦場は誰が請け負っているんだ？」

「明久たちじゃ」

「大丈夫なんでしょうか……」

隣で試験を受けていた姫路が心配そうに呟く。

「今は信じるしかなかろう。わしらも1，2科目受けたらすぐに復帰するからの」

「了解した」

もしかしたらこれは時間の勝負になるかもしれない。

姫路の補充が終わるか、Dクラスが一気に勝負をかけてくるか。

Dクラスの戦力は単純計算でFクラスの約二倍の戦力だ。

一気に決めてこようとすればひとたまりもないだろう。

さて、どうなるんだろうな？

召喚戦争編　第四話（後書き）

読んでいただきありがとうございました。

次回Ｄクラス戦が終了します、とは言っても

沢村の出番はありませんが（汗）

それではまた次回～

召喚戦争編　第五話

チェックメイトがかかりそうだ。

クラス分けテストのときに一科目も受けていなかった俺には
まだ数科目受ける義務が残っている。
けど、途中退席で失格になった姫路は俺より受ける必要のある科目
が少ない。

「あと5分です。名前が書いてあるか確認してください」

そしてこのテストが姫路の受ける最後のテストになる。……俺はま
だ三科目残ってるけど。
とにかく、この召喚戦争はあと１０分ほどで終わりを迎える。
Ｄクラスが勝負をかけてこない限りは、ね。

ガラッ

「……大変」
扉を開けて入ってきたのはムッツリーニ。
相当なにかに焦っていることが口調から読み取れる。

「ん、ムッツリー二か。どうしたんだ？」
「Ｄクラスが一気に勝負をかけてきた」
「なんだって！？」
「……Ｄクラスが教師を集め始めている」
「前線に来ている教師の名前は？」
「……数学担当の船越先生」
「船越先生だって！？」

船越先生・・・婚期を逃し、ぼんやりと過ごしているうちに三十路だけではなく
四十までいってしまった女性。ちなみに現在４５歳。
最近は単位を盾に生徒に迫るようにもなった危険人物である。
やりようによっては隙の作れる先生だけど……

「まさか……」
「……どうした？」
「なあ、この話って代表に伝えたのか？」
「……須川が伝えに行ったはず」

これを聞いたらもう、一つの結末しか予想できない。
おそらく坂本なら迷わずにそうするだろうな。吉井明久に合掌！

「……ムッツリーニ。Ｄクラスに関してはもういい。それよりも吉井に線香でも添えることだな」
「……？」
「すぐにわかる」

ピンポンパンポーン♪　（須川の声）

『連絡します！　船越先生、船越先生。吉井明久君が、体育館裏で待っています。
教師と生徒の垣根を越えた、男と女の大事な話があるそうです！』

こうなったら船越先生は、召喚戦争なんて放り投げて、迷わず体育館裏へ行くに違いない。

「……」
顔を引き攣らせるムッツリーニ。
「ま、そういうことだな」
彼の貞操の無事を祈る。南無阿弥陀仏南無阿弥陀仏
と同時に、なるべく長く船越先生を引きつけておいてくれるといいと思う。
いや、引きつけるってどころの話じゃないか。
下手したらあの人、死ぬまで吉井を追い続けることになりそうだ。
そして……
「時間になりましたので筆記用具を置いてください」
テストも終わった。勝負は決まったな。
チェックメイトだ……Dクラス代表！
「それじゃあ行ってきますね」
「ああ、頑張ってきてくれ」
姫路を見送って俺は次のテストを受ける。
Bクラスで俺の出番がまわってくるらしい。
そんなに期待はされてないみたいだけど。
しばらくしてから『Dクラス代表戦死！』の声が聞こえてきた。
姫路がとどめを刺したのだろうか。

何にせよ、これでFクラスにDクラスの教室と
自分たちの教室を交換する権利が与えられるわけだ。
でも俺たちはそれを行使しないことになっている。
かわりに坂本が指示したタイミングでBクラスの室外機を壊すという代償は払ってもらうけど。
これはBクラスを落とすときに利用される。勝利のために必要なピースの一つだ。
（でも、それはあくまで『ピースの一つ』。戦略が良くても頑張るのは結局生徒自身。
俺も頑張らないと）
まずは補充テストから頑張ろう！
☆
「ただいま～……っつっても誰もいないんだけどね」
俺は今、この一軒家に一人暮らしをしている。どこにでもあるような普通の家だ。
ちょっとぼろいけどな。
俺の部屋はこの家の二階にある。ちょうどリビングの真上だ。
一人暮らしなのに自分の部屋とかが決まってるのはおかしいと思うだろ？
……自分でもそう思うさ。

でも、なるべく親の部屋だった場所はそのままにしておきたいんだよ。
なんていうんだろ？　そこにその人がいた、ってことが感じられるじゃん？

ギシギシと軋む階段を上って自分の部屋に向かう。

部屋には勉強机に本棚、ノートパソコンが置いてあったりする。
割と普通の高校生の部屋だ。

本棚の中の一角には一枚の写真が飾られている。
そこにはひと組の女の子と男の子が仲良く写っていた。

この写真は大切なもの。
後悔と自責の象徴だ。

「この子には酷いことしちゃったよな……。今どうしてるんだろう？」

会いたくても会えない。謝りたくても謝れない。
心に残るのは己に対する嫌悪感のみ。
ただそれを振り払うがために彼は机に向かいつづける。

……成績は一向に上がらないけど。

「俺、バカでよかったよ。集中すれば他のことなんて忘れてしまえ

るからな」
逃げてばっかりだけど何もできない。俺は弱い人間だから……。

「さて、始めるか。明日はBクラスとの戦うことになっているし」

召喚戦争編　第五話（後書き）

雰囲気つけるのが難しい！
なかなか思った通りに表現できませんね。

そんな感じで未熟者の作者ですが
これからもよろしくお願いしまーす

召喚戦争編　第六話

――――昼休み

Dクラス戦を制した俺たちは、これからBクラス戦を迎えることになる。
とは言っても、流石に連戦はきつい。
そういうわけで今日一日は休みとなっている。

「じゃあ、僕たちは言ってくるよ」
「ああ。残さず食べてこいよ」

ここで俺と吉井たちは別行動することになっている。
『別行動』という響きこそ、なんだか大それたもののように聞こえるけど、
実際はそれほど大したことではない。

吉井達はこれから、姫路の作ってきた弁当を屋上で食べることになっている。

でも俺には姫路の弁当を戴く気にはなれなかった。
そこで『別行動をとる』って話になった。

「本当にいいのか？」
「ああ、構わん。というか今更俺の分があるわけないだろ」
「いえ、一応作ってきたんですけど……」

なんてイイ子なんだ、姫路！
君のその優しさには時折、僕の心も揺らいでしまうよ。

しかし！　その好意に甘えてしまうわけにはいかないのだ。
もし僕がその誘惑に負けてしまえば、きっと俺は――――

「おい沢村。さっきから顔が気持ち悪いぞ」
「なんだか自分の世界に入っちゃってるみたいだね」
「あの～……沢村君、どうしたんですか？」

みんなひどいや。

「ああ、ごめん……」

気を取り直して、と。

「それでも弁当はいらない。男に二言はないよ。……ちょっと確認したいこともあるし。
俺の分はそっちで分けて食べておいてくれ」

「わかった」
「仕方ないですね」

「ああ。じゃあそういうことで頼むよ。んじゃ」

手を振り、俺は目的の場所へと向かった。

☆

文月学園の昼休みはかなり長い。
少しくらい外出しても、充分5時限目には間に合う。

もちろん外出は禁じられているのだが。
もし外に出ようとなんてすれば警備員さんに見つかって、生活指導室まで補導されてしまう。

しかも生活指導を行うのは鉄人だ。一旦補導されれば只では済まない。
そのこともあって、普通は校舎から抜け出そうなんて考えるやつはいない。

だけど――――

「このあたりで待ち合わせだったかな？」
「チクショー、携帯忘れちまったから場所の確認もできやしない」

俺は駅の近くの公園の噴水前に立って辺りを見回している。
校舎からいとも簡単に抜け出して。

今まで幾多……でもないか。
先人達が『昼休みに校舎の外へ出よう』と日夜努力し、
そして鉄人の餌食となっていった。

だがその上で出来あがったものがある。
それが抜け道。
一年生の時に偶然見つけたものだったけど、これが結構役に立つ。

「おっす沢村。元気してるか？」

不意に声がかかる。
――よかった。間違ってなかったか。
メールで集合場所のことは聞いていたものの、肝心の携帯を忘れて

しまったから
ここで本当に合ってるのか不安だった。

声をかけてきたのは靭上剛という、名前に似合わず柔和な雰囲気を持った好青年だ。
柔和なのは、あくまで雰囲気だけで顔はそのまま名前の通りゴツイのだけれど。

街中でドスのきかせた顔をして、黒ずくめの服を着て街中を歩けば、堅気ではない人間と間違えられそうな顔だ。うん、きっと間違えられることだろう。

「それで今日はどうしたんだ？」
「ああ。今日はな……」

こいつと初めて会ったのは『一年前の事件』があったという日の5日後だ。

街中で散歩しているときにいきなり後ろから『話したいことがある』ってスゴイ顔で言われたものだから怖かった。
だってコイツの顔、すごくゴツイのだもの。

その後、喫茶店まで移動して彼とその、『お話』をした。
そのときの俺にはコイツが一体何を言っているのか分からなかったし、そのせいで『話』をしたっていうよりも、一方的な『演説』を受けたとでも表現した方が、なんだかしっくりくる。

その『演説』は非常にトンデモな設定を凝らした内容で、非現実的な話だったから、初めは宗教かなんかの勧誘だと思った。でも力ずくで逃げようにも逃げられなかっただろうし、そのまま黙って話を

聞き流していたよ。

「？　どうしたんだ沢村。俺の顔なんか見つめて」

でも、コイツが発した一つの言葉で、俺の意識は全て持っていかれてしまった。

……ああ、別に気絶したとかどうのってことではないんだ。

強烈な興味がコイツの話へ向かっただけのこと。

「おーい、目の焦点が合ってないぞー。どうしたー？」

『お前の無くした、一週間分の記憶について知っている』

そう、それだけ。その一言だけで興味の対象は一気にコイツの話へと移った。

日常の出来事などすぐに忘れる。

それもそうだ。覚えていたって仕方のない、不要な情報なのだから。

一週間分の記憶ごときに、そこまで必死になる必要など、どこにもない。

だって、俺たちはこれまでの１６、１７の人生の中でいったい何年分のことを忘れてしまったのかもわからなくなるくらいに色々な情報を消去してきたのだから。

でも、違う。俺にとってはその全てがおかしい。

薄れてしまった故郷の記憶も、失われてしまった一週間分の記憶さえも、そのなにもかもが。

おかしい。

だって、

それは俺だけが、俺だけは失うはずのないものだから。
みんなが例えどうでもいい、忘れてしまうような情報(きおく)でも。
俺だけはそれを、いつまでも覚えているようなバカだから。

みんなみたいに『必要な情報』と『不必要な情報』も分けられないような優柔不断な
ポンコツだから。

だって、俺は――――。

「おい、沢村！」
「ｏｈ？」
「『ｏｈ？』じゃねーよ！　いつまでボーっとしてるんだ！」
「ハッ！　す、すまん。何について話してたんだ？　ちょ、ちょっとボーっとしてて」
「そんなの見りゃあ分かるわい。……さては、また妄想の世界にでも飛び込んでおったんだろ。
俺らの横を通って行ったＯＬさん、美人だったからなあ」
「なっ！？　ち、ちがっ……！」
俺はただ、一年前のことを回想していただけで、そんなイヤラシイことはっ！
「照れるな照れるな。お前も健全な男子っつーことだ。彼女がいない男が出来ることといえば
女子の艶姿を眺めるぐらいのモンだからな」
「なんだよ、その言い方。じゃあ、お前は彼女でもいるっていうのかよ」
ま、いないよな。うん、いない。コイツがそんなリア充野郎であるはずが、

「いるぞ」

一小節ぐらいの静寂が流れる。

「……嘘、だよな？」

「ホント」

そういうと、靱上はポケットをゴソゴソとまさぐり出す。

「お、あったあった」

そう言って取り出したのは、携帯電話。

「なんだよ。どういうことだよ、それ」

「こういうこと」

そう言って液晶の画面を俺の前に提示してくる。

移っていたのは一人の女の子。

金色に光る髪の毛も、翡翠色に輝くその瞳も、艶々とした輝きに満ち溢れている。

可愛い。エロい。好み。

「誰？　この女の子」

「俺の彼女」

「えっ？」

「エッ？」

「……もう一度聞くよ？　この女の子、誰？」

「だから、俺の彼女」

満面の（ドヤッ）に満ち溢れた笑顔を送られる。

口端をどんどん吊り上げていく靱上と、心の余裕がなくなっていく俺との温度差はどんどん広がっていく。

「嘘、だろ？　これ、どっかからダウンロードしてきたやつなんだろ？　お前がこんな可愛い女の子と付き合えるわけないもんな」

「失礼な。ま、これを見れば納得するだろ。ほれ」

携帯の液晶をぱたんと閉じて、その本体を裏返す。

そこにはピンク色のナニかでデコレートされた、何枚もの小さな写真が貼ってあった。
「プリクラ、だと……？」
全ての写真に写っている一組の男女。
一人は紛うことなき、さっき液晶で見た金髪の美少女。
そして、もう一人は
「靱上、剛……」
「プリクラはダウンロードできないぜ？　これは全部その場で撮ったものだぞ」
勝ち誇った顔をする靱上。
いや、別にお前とこの美少女が一緒に写ってるだけだったら、まだ良かったんだぜ？
好意を持っているかどうかは別として、まだ『友達』の関係で留まっている可能性で慰められるから。
でも、流石にここまで見せられると、もうふっ切れるしかなくなってしまうよ。

キスしてるところまで見せつけられちゃうと、ねえ？

「この……」
「ん、どうした？」
まだ笑顔を張り付けてやがるこの性犯罪者。
もうダメだ。とめどなく流れてくるこの思いを止められないよ。

「このリア充野郎がぁぁぁぁ！！」
広場に響き渡る変態の遠吠え。
少なくとも、その場にいた女子たちは彼を彼氏にしたいとは思わないだろう。

彼はまた一人、『同胞』を失ってしまった。
「……一体、俺になにが足りないっていうんだ？」

そして沢村、本日二回目の災難。

昼休みの時間はとっくに過ぎていて、すでに先生は五時間目の授業の出席をとり始めている。
それでも、腕時計代わりに携帯電話を用いている沢村は気づかない。
教室の片隅に置かれたバッグの中で、昼休み終了の合図を告げる携帯のブザーが空しく鳴り響くだけ。

「あれ？　なぜ沢村君はいないのでしょうか。４時間目までは出席していたようですが」
出席簿を見てつぶやく先生。
「坂本君や吉井君も普段と違って顔色が悪いし何かあったのでしょうか？」
「……あとで西村先生に伝えておきましょう」

召喚戦争編　第六話（後書き）

読んでくださった皆さんどうもありがとうございます。

いまさら気付いたんですけど、この小説って
お気に入り登録がされていたんですね！
登録してくれた方、ありがとうございます。

そして作品に評価をつけてくれた方、感謝します！
ホント、励みになります！

改めてこれからもよろしくお願いいたします。

それではまた次回！

召喚戦争編　第七話

ガラッ

「それでは失礼しました～」

「もう二度とこんなことはするなよ？」

「……」

「もう一発いっとくか？」

「い、いえ……結構です。それでは」

できるだけ物音をたてないようにしながら扉を閉める。

つい先ほどまで、彼は生活指導室で鉄人に教育という名の愛の鞭を享受していた。

腫れあがった顔は、それをどこに向けているのか全くはっきりしない。

まるでゾンビだ。

――ああ、携帯を忘れただけでこんな状況になってしまうなんて。

つーか昼休みにちょっと抜け出したくらいで、こんなに殴られるもんかよフツー。

……まあ、確かに午後の授業を全部すっぽかした、っていうのは問題かもしれないけどよ。

彼が文月学園の敷地内に戻ってきたのは午後４時ごろだ。

ちょうど帰りのＨＲが終わる時間帯である。

５時間目、いや６時間目が終わっていることぐらいは想像していても、

まさかＨＲが終わっていたとまでは思わなかった沢村。
廊下で鉄人と遭遇してしまったのが運のつきだった。
――あーあ、あいつらは姫路の弁当食って幸せな気分になってるんだろうな……。
クソッ、携帯なんて忘れるんじゃなかった。
もういいや、とりあえず教室に戻ろう。
作戦会議もあることだし。

「それで次の召喚戦争だが――」

ガラッ
「おーす」
突如、扉が開き、かけ声がされる。
そこから出てきたのは――

「ゾンビ？」
「ちげーよ。俺だ」

「んでＢクラス戦のことだけど、どうなったんだ？」
そう問いかけてくる沢村の青く腫れた顔には夕焼けが反射していて、
余計に不気味に感じられる。

「ああ、宣戦布告は済ませた。あとは作戦についての会議だ」

「ねぇ、代表。さっきから思ってたんだけど、どうして相手がBクラスなの？目標はAクラスなのよね？」
島田が代表に質問を投げかける。まあもっともな疑問……かなぁ？Dクラスを狙ったところで分かってもいいと思うんだけどな……。
「正直に言おう。どんな作戦でもFクラスの戦力じゃあAクラスには勝てない」
「じゃあどうするの？　ウチらの最終目標はBクラスに変更ってこと？」
「いいや、俺たちの目標はAクラスだ。それは変わらない」
「雄二、さっきと言ってることが違うじゃないか」
「いいや、違わないさ。さっき言ったのはクラス単位での話だ。個人戦に持ち込めば勝機はあるさ。つまり一騎打ちだ」
「でも、そんなのどうやって？」
「そのためにBクラスを使うのさ」
そう言って意地悪く口の端を吊り上げる。
全く、頼りになるというか憎たらしいというか。
「召喚戦争のルールは知ってるよな？」
絶対に覚えていないであろう吉井にわざわざ話を振る代表。
意地が悪い。
「も、もちろん……」
一応助け舟でも出してやるか。
「負けた方が下位クラスだった場合は設備のランクを一つ落とされ、上位クラスが負けた場合は下位のクラスと設備の交換をすることになるんだ。

坂本はこのルールを利用して、『設備の交換を免除する代わりにAクラスに特攻しろ』
といった交渉をBクラスにふっかけるつもりなんだ」

「それがなんでAクラスとの一騎打ちにつながるの？」
「それをネタに今度はAクラスに交渉を持ちかけるんだ。
『Bクラスとの戦いのあとに攻め込むぞ！』とな」

「なるほどね～」
「それならば確かに受けてもらえるかもしれんのぉ」
ようやく全員が納得してくれたようだ。

「ところで代表」
「なんだ？」
「宣戦布告には誰が行ったんだ？」
「ああ、それはな……」

（回送中）

「それじゃあ明久、Bクラスに宣戦布告してこい」
「断る、雄二が行けばいいじゃん」
「そうか、ならジャンケンで決めることにしないか？」
「ジャンケン？」
「OK。乗った」
「ただのジャンケンじゃつまらないし、心理戦ありでいこう」
「わかった、僕はグーを出すよ」
「そうか、なら俺は――――――」
「お前がグーを出さなかったらブチ殺す」
「行くぞ、ジャンケン」
「わぁぁっ！」

（坂本）パー
（吉井）グー。
「決まりだ、言って来い」
「絶対に嫌だぁぁぁ！」
「Ｄクラスのときみたいに殴られるのを心配してるのか？それなら今度こそ大丈夫だ。
俺が保証してやる」
「Ｂクラスは美少年好きが多いらしいからな」
「そっか。それなら確かに大丈夫だね」
「でも、お前ブサイクだしな……」
「失礼な！３６５度どう見ても美少年じゃないか！」
「……明久、円の角度は３６０度」
「確かに５度多いな」
「実質５度じゃな」
「三人なんて嫌いだっ」

（回想終了）

「……なるほど」
流石、吉井。そしてドンマイ。きっといいことあるさ。
「まあそういうことだ。じゃあ、さっさと作戦会議を再開するぞ」

☆

「よし、作戦会議は終了だ。解散！」
「「「「「「おつかれ～」」」」」」

さっさと帰りの用意をして帰路につく。
しばらく、ぼーっとしながら歩いていたら、忘れ物の存在に気付いた。

「やべ、忘れ物しちゃったよ」

ってことでわざわざ戻ってきてみたんだが、

「姫路、何をやっているんだ？」
「え？　あっ……！」
俺の視界の中に入ってきたのはひどく慌てた姫路と、
卓袱台の上に置いてあるかわいらしい便箋。

ふむ、こんな放課後に教室に残っていて。
ちゃぶ台の上には『好きです』が綴られた可愛らしい便箋。
それにこの慌てた態度。こ、これは……間違いない。
昂ぶる気持ちが前面に出てこないように注意しながら聞いてみる。

「それ、ラブレター？」
「ち、違うんですっ！　こ、これはその……」
余計に慌てる姫路。
手をパタパタと振って必死に否定の意を示そうとする。
「そう、不幸の手紙なんです！」
「……へ～？」

「私はこの手紙を使って、みんなを不幸のどん底に突き落としてやるんです！」
まあ、確かに姫路に彼氏が出来たら、俺も含め須川とか吉井とかその他諸々が不幸なことになるな。
あながち間違ってもいない。あ、いや……吉井は違うな。

あいつはむしろ、幸福を享受する側の方か。
手料理の件といい、吉井が怪我したときの心配の仕方といい、なんとなく姫路からの好意を受けている気がしてならない。結局、代表とムッツリーニと秀吉も食べたらしいけど、あくまでオマケのようなものだろう。実際、姫路の狙いは吉井明久ただ一人だけだ。

不幸の手紙、か。
「『好きです、あなたのことが』……ね。倒置表現まで使って、かなり真剣なんだな」
「え？　あ、……み、見ないでくださーいっ！！！」
急いで卓袱台の上に放置してあった便箋を手に抱える姫路。
ちょっとした涙目になって、こちらを睨んでいる。
トマトみたいに真っ赤に染まった顔でそんな表情をされても、俺には萌えることしかできない。

いやぁ、まさかラブレターなんていう古典的な告白方法だけじゃなくて、姫路のこんな表情も見ることができるだなんて……眼福っ！
羨ましいぞ、吉井。君は姫路のこんな表情まで独り占めできるんだ。

頑張りなよ。

「……さて、そろそろ邪魔者はお暇しますか」
「（むー）」
さっきから表情がほとんど変わっていない姫路。

しょうがない。俺たちの姫君に拗ねられても困る。

「これは俺の独り言だが、吉井明久は――」

「っ！？」

「今、好きな人がいるらしい」

「えっ？　そ、そんな……」

「その人の名前は……」

「だ、誰なんですかっ？」

「忘れちまった」

「（どよーん）」

「まあ、そう落ち込むな。そうだな、でもイニシャルは覚えているぞ」

「確か――Ｈ・Ｍだったかな？」

「えっ？　そ、それって……」

「独り言はおしまいだ。俺はもう帰るぞ。また明日な」

座布団に座りながらポーッとする姫路を置いて、帰路に着く。

「はあ、また先を越されちまったな。吉井にも、あいつにも」

夕焼けを見上げながら、少しだけ黄昏てみる。

「俺にも、そんな幸せな時間はくるのかなぁ？」

「ま、俺みたいなアホを好きになってくれる人もそうそういないんだろうけど」

「でも、少しさみしいな」

「……帰りにちょっとスーパー寄ってくか。確か、今日は卵が特売だったはずだ。

まだ残ってるといいんだけどなぁ」

召喚戦争編　第七話（後書き）

……雰囲気作るのってホントに難しいですよね、ホント。
それではまた明日！

召喚戦争編　第八話

「さて皆、総合科目テストご苦労だった」
Dクラス戦で点数を消耗したやつらは（といっても全員だけど）
午前中の時間をフルに使って総合科目テストを受けていた。
一切戦争に参加していなかった俺はその間、暇を持て余していたわけだが。

「今日はBクラスとの召喚戦争だがやる気は充分か？」

『うおおー！』
総合科目テストを受けた直後なのに士気がまったく下がらない。
……むしろ上がっているくらいか？

「今回の戦争は敵を教室に押し込むことが重要になる。
その為、開戦直後の渡り廊下戦は絶対に負けるわけにはいけない！
よって、それなりの戦力を投入しようと思う。沢村！　……出番だ」

『うおおおぉぉぉ！　“ロキ”の参戦だぁぁぁ！！』

「だから俺はそんな凄い人じゃないんだけどなぁ……」
でも前線に入れてもらえるのはありがたいね。
正直Dクラス戦の時に何もしなかったというのは苦痛だったからなぁ。

あと靴上！　あいつに彼女がいて俺に彼女がいないってのは納得がいかない！
その分も含めて今回は働く！　覚悟しろよ、Bクラス！

「そして指揮は姫路に執ってもらう。　野郎ども、しっかり死んでこい！」
「が、頑張りますっ」
『うおぉぉぉっ！！』
俺の二つ名（認めてないけど）と姫路の参戦で前線部隊の士気は最高潮にまで達した。やっぱノリがいいね、Ｆクラス。
キーンコーンカーンコーン……
昼休み終了のベルが鳴り響く。
戦闘開始だ！

「いたぞ、Ｂクラスだ！」
「高橋先生を連れているぞ！」
前方にはＢクラスの前線部隊が現れていた。
その数、たったの十人。
「あくまで様子見ってことか」
「いくぞっ、かかれ！」
近藤が勢いよく先陣を切って飛び出した。
それに続き、数人がＢクラスに戦いを挑んでいる。
だが……

『Ｂクラス　野中長男　総合１９４３点』
ＶＳ
『Ｆクラス　近藤吉宗　総合７６４点』

『Ｂクラス　金田一祐子　数学１５９点』
ＶＳ
『Ｆクラス　武藤啓太　数学６９点』

『Ｂクラス　里井真由子　物理１５２点』
ＶＳ
『Ｆクラス　君島博　物理７７点』

二倍近い点数の差に、あえなく敗退していくＦクラスの前線部隊。
ちっ、士気が上がるのはいいがこれじゃあただ死に急いでるだけだ。
少し作戦を手直ししてみるか……？

「お、遅れ、まし、た……ごめ、んな、さい……」
しばらくして姫路が到着した。息も絶え絶え、急激な運動に体がついていけなかったようだ。
息が切れているのはなんでかって？
俺たちが姫路を置いて全速力でここまで来ちゃったからだね。
ごめん姫路。そして、働いてもらうよ？

「姫路、悪いがちょっとピンチだ。やつらの援護に入ってくれないか？」
「は、はい。わかりました」

「来たぞ！　姫路瑞希だ！！」

「長谷川先生、Ｂクラス岩下律子です！　Ｆクラス姫路瑞希さんに、数学勝負を申し込みます！」
「律子、私も手伝う！」
姫路が現れた途端に、Ｂクラス陣営は表情を引き締める。
流石にＦクラスに姫路がいるっていう情報はまわっているようみたいだ。
敵の前線には十人しかいないのに二人もまわしてきた。
相当警戒されているなぁ。

それでも甘いね。今の姫路を止めるには二人じゃ無理だ。
俺は知っている。
Ｄクラス戦の時、姫路の隣でペンの動くスピードの差に劣等感を感じながら補充テストを受け続けた一人だから分かる。
「姫路さーんっ！」「やっちまってください！」「頼りにしてるぜー！」「姫路さん愛してる」
今回の姫路は、スゴイ。

改めて言おう。二人なんかじゃ絶対に止められないさ。

『Ｆクラス　姫路瑞希　数学４１２点』
ＶＳ
『Ｂクラス　岩下律子＆菊入真由美　数学１８９点＆１５１点』

……最低、五人くらいは持ってくるんだったな。

「４００点越え！？」
「私たちで勝てるわけないじゃない！」

慌てたところで、時すでに遅し。

姫路の召喚獣が綺麗な腕輪を付けた左腕を敵に向ける。
「ちょっと待って！？」
「避けなきゃ！」
詰み、だ。
腕輪から一筋の光が放たれる。
放たれた光は二匹の召喚獣に向かっていく。
片方は横へ跳んで何とか攻撃から回避したが、
逃げ遅れた方の召喚獣は光に包まれ――
キュボッ
一瞬でけしずみと化した。
「り、律子！？」
「よそ見しててていいのかい？」
「あっ……」
「これも戦いですので失礼します！」
姫路の召喚獣は一瞬で菊入の召喚獣に肉薄し、大剣で一刀両断する。
もちろん相手の召喚獣は戦死。補修室送りだ。
「菊入と岩下がやられた！」
「なんだとぉ！？」
「予想以上に危険な相手だ、油断するな！」
『やったぜ姫路さん！』

『俺たちも行くぞ！！』

「姫路、一旦下がってくれ！　今ので消費した点数の補充を！　そしてFクラス！
お前ら、戦死は絶対に避けろよ！　ただし、限界まで逃げるんじゃないぞ！」

『了解っ！』

これでいい。Fクラスの連中は人一倍保身に長けているようだからな。
『生きていれば姫路さんとウホウホできる』という保険をかけておけば、むざむざ戦死するやつはいないはずだし。士気も上がっている今はこれでちょうどいいはずだ。

……アレ？　なんで俺が指揮を執っているんだろう？
ここの指揮を任されたのって姫路だよな。ま、いいか。
姫路って戦いとか、そういう野蛮なことには疎そうだし。

「さて、俺も出るかな？」

「沢村！　大変じゃ！」
「どうしたんだ？」
「とにかく教室に来てよ！」
吉井と木下がやけに焦っている。
というか目が真剣そのものだ。
姫路が戻ってくるまでの戦場の指揮を一旦須川に任せて
俺は教室へと急いだ。

「……」

俺はあまりの教室の酷さにただ絶句した。
「何が起こったんだ……」
目の前にあるのは穴だらけになった卓袱台、へし折られたシャーペン、
ボロボロにされた消しゴムだけだった。
そしてその中には、地元の友人たちからもらった思い出のシャーペンも。
話は変わるが、俺の生まれは東京じゃない。
どこか遠い田舎に住んでいたんだ。
自分の住んでいた町の名前も覚えていないけれど、それは確かに、漠然と僕の記憶の中に残っている。
そこが、どんな場所だったのかどうかも忘れてしまったのだというのに。
空しい思いが胸の中を不自然に渦巻く。
俺があの少女に謝ることも会うこともできない理由の一つ。
彼女との思い出の場所に行けば、あるいは会えるのかもしれないけれど。
そんな都合の良い場所、思い当たる節もない。
なにもかもを忘れてしまった俺への。
たった一つ残された、故郷への手がかり。
当時の友達が別れの間際でくれた、手作りのシャープペンシル。
なぜか、故郷に関わることの内、このシャープペンシルのことだけは忘れることも、記憶が薄れるということもなかった。

だからこそ俺はこれを大事に、大切に扱ってきたのだ。
全ては友と俺と、あの少女の為に。

……くそったれが。

「犯人は……どこのどいつだ？」
「Ｂクラスの根本だ」
いつの間にか、そこにいた坂本が答えた。
「お前はこの教室にいなかったのか」
なんとか冷静さを保ちながら聞いた。心の動揺がばれないように。

「ああ実はな、協定を結びたいという申し出があってな。調印の為に教室を空にしていた」
「協定？」
「ああ。『４時までに決着がつかなかったら、戦局はそのままにして続きは明日午後９時に持ち越し。その間は試召戦争に関わる一切の行動を禁止する』ってな」
「その間にやられたのか……」
「そのようだ」
坂本が苦虫をかみつぶしたような顔をする。
「だが、あまり気にするな。修復に時間はかかるが、作戦に大きな支障はない」
「そうだね」
「じゃあワシは筆記用具の手配をしてくるからの」
「ああ、頼むぞ」

……頭を激痛が襲う。締め付けられるような痛みがじわじわと強くなっていく。

その痛みに呼応して起こる、嘔吐感とめまい。
どれもこれも自分には耐えがたい苦しみだったけれど、さらにそれ以上に苦しく感じるモノがある。
それは、自分が自分じゃなくなるような感覚。

体から力が抜ける。

「沢村！？　どうしたんだ！？　沢村ぁぁぁ！！」
「大丈夫！？　熱っ！　大変だ、早く保健室へ！」

俺、どうしちゃったんだろうな？　なんで倒れちゃってるのかな？
なんだろう。自分で自分がわからないや。
俺はなにをしているんだろう？

吉井と坂本の声をバックミュージックに、俺は意識を手放した。

召喚戦争編　第八話（後書き）

読んでくださった方々、どうもありがとうございます。
今日はある程度進めてみました。楽しんでいただければ幸いです。
それではまた次回！

召喚戦争編　第九話

「ん？　ここは？」
目を覚ました俺はまわりを見渡してみた。
白いベッドに医薬品の入った棚、そして消毒液のような特有の匂い。
……どうやら俺は保健室へ運ばれていたようだ。

うーん……俺、何かやったっけ？
なんで保健室なんかに運ばれてるんだ？

まあいいや、とにかくここから出ないと何も始まらない。
そう思い、扉に手をかけた瞬間……不意にドアが開いた。

「ぐはぁ！？」
内開きのドアだったのが運の尽きだった。
俺は顔面強打を食らい、鼻から血を噴き出した。
「ん？　もう起きてたのか」
開いたドアから現れたのは坂本だった。
後ろには吉井たちが控えている。……須川がいるのは気のせいだろう。
「なんでお前、鼻血なんて出しているんだ？　ま、まさか……」
「違う！！　お前の開けたドアにぶつかって出てきたんだよ！
決して、保健室で卑猥な妄想をしてたわけではないぞ！」
「俺はそこまで言ってないぞ？　まさか本当に？」
『沢村君、不潔です……』
『まさかアンタまでそんな人だったなんて……』
『君も僕たちと一緒だったんだね！』
『……（ぐっじょぶ！）』

『我が同志よ！』
「だから違う！　俺は文脈的に坂本が何を言おうとしているのかを予想しただけだ！
お前らまで勘違いするんじゃないっ！」
『『『『うわぁ～……』』』』
「だからその悪ノリをやめろぉぉぉー！！！」

「落ち着け沢村」
「原因作ったのお前だろうが！　はあはあ、……もういいや。それで、なんの用だ？」
「なんだかCクラスの動きが怪しい。どうやら召喚戦争の準備を始めているようなんだ」
「召喚戦争の準備？　漁夫の利を狙ってるってことか？」
「おそらくはな」
「なるほど、そこで協定を結びに行くってことだな？」
「理解が早いやつは助かるな。どこの誰かとは大違いだ」
誰だ？　これくらいのこともわからないやつは。
『ハクションッ！　可愛い女の子が僕のうわさを！？』
……あいつか。しょうがないな……。
「というわけだ。とにかくお前も俺たちと一緒に来てくれ」
「ん、了解」

というわけで俺たちはCクラスへと向かっていった。

「あ、ごめん。ちょっとトイレに行ってきていいかな？」
「なんだよ沢村、ちびったか？」
「ちげーよ。つーか、起きた時から溜まってたんだから、ここまで我慢しただけでも勲章ものだろ」
「ったく、しょうがねーな。じゃあ俺たちは先に交渉してくるぞ。トイレから出たらCクラス前まで来てくれ」

「了解した、それじゃ！」
早くトイレに行かないと！　ダッシュダッシュダッシュ！

「あいつもしょうがないな……」
「無理もないよね。４時までずっと寝てたんだもん」
「寝てた！？　沢村は何をしてたの！？」
「そうだぞ！　我らが“ロキ”はどうしたんだ！」
「落ち着け、お前ら。いま大事なのはそっちじゃないだろ」
「というか、沢村は……」
「おっと明久、Ｃクラスに到着した。その話はまた後にしろ」

ガラッ

「Ｆクラス代表の坂本だ。このクラスの代表は居るか？」
「私だけど、何か用かしら？」

扉をあけると同時に、返事をしたのは１人の女生徒。名を小山友香。
かなりの美人で、髪はショートカット、バレー部に所属している。

「Ｆクラス代表としてクラス間交渉に来た。時間はあるか？」
「クラス間交渉ねぇ。ふぅん……」
そういっていやらしい笑みを浮かべる小山。
「ああ。不可侵条約を結びたい」
「不可侵条約ねぇ……。どうしようかしらね、根本君？」
教室の影からのっそりと現れる根本。
小山以上にいやらしく、卑屈な笑みを浮かべている。

「当然却下。だって、必要ないだろ？」
「根本君！　Ｂクラスの君がどうしてここに！」
吉井が驚きの声を上げる。
根本君の後ろには何人かの取り巻きが控えており、中には数学教師の長谷川もいる。

「酷いじゃないか、Ｆクラスの皆さん。協定を破るなんて……。俺は試召戦争に関する一切の行為を禁止したのにな」
「何を言って……」
「先に協定を破ったのはそっちだからこれでお互い様だよな！」
根本が告げると同時に、控えていた取り巻きが動き出す。
「長谷川先生！Ｂクラス芳野がＦクラス代表坂本に――」
「させるか！　Ｆクラス田中が受けて立つ。サモン！」
坂本が攻撃されそうになるのを、田中が棍で防ぐ。
ギリギリ、と剣と棍が押し合う。

武器の質も実力も、ＦクラスはＢクラスには敵わない。
クラスの違いはそれを端的に表している。
棍にヒビが入る。押し合う力に棍が負けてきている。

「早く行け！」
田中の切羽詰まった声に、そこで硬直していたが反応する。
「皆、今のうちに逃げるぞ！」
Ｃクラスを後にし、坂本達は陣地へと駆け出していく。
「うわぁぁぁ……」
田中の悲鳴が走る全員の耳へと届く。
「くそっ、根本め！」

「逃がすな！　坂本を討ち取れ！」
田中を倒した後もしつこく追い続けるＢクラスの生徒たち。

「はぁ、ふぅ……」
姫路までもが疲れだす。急激な運動に耐えきれなくなったらしい。
その様子を見た吉井がなにかを決心したように、坂本に取り合いだした。

「雄二！」
「なんだ明久！」
「ここは僕が引き受ける！　雄二は姫路さんを連れて逃げてくれ！」
「よ、吉井君……私のことは気にしない……で」
坂本は迷ったように目を伏せる。が、姫路の様子を見てなにか察したのか
「……わかった。あとは頼むぞ、明久！」
『生きて帰ってこいよ』と合図しつつ、姫路を連れて本拠地へと急行した。

「じゃあウチは残ってもいいのかな？」
「え？　あ、危ないよ。相手はBクラスなんだから……」
「なんでアンタは危なくないのに、ウチが危ないのよ」
「だ、だって」
「さっきの先生を見たでしょ？　長谷川先生は数学の先生よ。ウチ、数学は得意だから」
「でも」
「あー、もう焦れったいなぁ！　こういう時ぐらい頼りなさいよ！　ウチらはその……仲間、でしょ？」
「そ、そうだけど」
「じゃあ、こうしましょう。条件付きで手を貸すわ」
「条件？」
「ウ、ウチのことを、その、……美波って、呼んで？」
「へ？　そんなことでいいの？」

「いいのよ！」
顔を紅潮させる島田。
「じゃ、じゃあ美波！」
「うん」
「一緒に戦ってくれないか？」
「もちろん！」

楽しそうな声で返事をする島田。
（このあたりの男らしさが、女の子にモテる原因なんじゃないかなぁ？）
吉井はふと、そう思う。

「ふぅ～、すっきりした」
さて、Ｃクラスの方に向かおうかな？
俺が交渉の場に赴いたところで、特になにかが変わるわけではないと思うけど。
小走りで教室へと向かう。

ん？　なんか騒がしいな。
何が起こっているんだ？

あれは吉井と島田？　相手は……Ｂクラスの連中！？
なんでここで召喚戦争なんて行われているんだ？

代表たちが無防備に保健室に顔を出すくらいだから、今日の試召戦争は終わってると思ったのに。
しかもなんだ？　あの異様な光景は。なんであんなに少人数の戦いを強いられているんだ？
いや、今はそんなことはどうでもいい。吉井と島田をどうにかして助けないと。

戦況を把握する。
島田は持ち前の数学を駆使、吉井は“観察処分者”の長所である、召喚獣の操作能力を
活かしてなんとか対抗している。６対２の状況で。

……よく耐えている。吉井はともかく、島田はスゴイ。
俺みたいに先生の手伝いをしていきながら、たまに駄々こねて召喚獣を呼び出させてもらったりして、操作を練習したわけでもないのに。
どうして、あそこまで頑張れるんだろう？

ヤバい、なんか俺の闘争本能に火が付いちゃったみたいだ。
アイツらを見てると、胸が熱くなってくる。

「あ、先生。すみません、鉛筆が転がっちゃって。拾ってくれませんか？」
「沢村君ですか。はい、わかりました。……はい、どうぞ」
「すいません。ありがとうございます」

よっしゃー、狙い通りだぜ！
長谷川先生が消しゴムを拾う為に移動する。
その動きに沿うように、召喚フィールドも動く。

フィールドの端で戦っていた、両陣の召喚獣もフィールドの範囲外となったことで、消滅した。

『なんだと！？』

「吉井、島田。代われ、俺が出る」
「さ、沢村？　なんでここに？」
「愚問だな。さっきトイレに行ってきた帰りだよ」
「でも」
「ここで俺たちがお前たちを失ってしまうと、結構きついんだよ。そういうことでいい？」
「大丈夫なの？」
「ああ、任せてくれ」

「……わかった。ここは頼むよ、沢村。行こう、島田さん！」
「無事に帰ってきなさいよ？」
そう言って二人は廊下を駆けていく。
二人を見届けてから、相手の方へ向き直る。

「ま、そういうわけだ。これからは俺、沢村優也が相手になろう」
Ｂクラスの生徒六人に俺はそう言い放った。

召喚戦争編　第九話（後書き）

読んでくださった方々ありがとうございます。
そして、お気に入り登録、感想を送ってくださった方もありがとうございます。

楽しんでいただけたのなら幸いです。
それではまた次回。

召喚戦争編　第十話

「ここからは俺、沢村優也が相手になろう」

俺はBクラスの6人に対し、そう言いきった。

「だれだこいつ？」

「知らないが、さっきの会話を聞いた限りではFクラスのやつだろう」

「じゃあ雑魚だな。こんな奴さっさと潰して代表を討ち取るぞ」

「そうだな。早くしないと逃げられちまう」

代表を倒す？　ははあ……なるほどね。

道理であいつらが必死で応戦してたわけだ。

普段の吉井だったらなりふり構わず一人で逃げていただろうからなぁ。

人一倍、保身には必死なやつだし。

……まぁ、今はどうでもいいや。

とにかくこいつらを掃除することだけを考えるとしよう。

今日の召喚戦争には何故か寝てたせいで、あまり参加できなかったからなぁ。

今ここでそれを取り返すチャンスが巡ってきたわけだ。

素直に感謝しよう。

「先生、ここにいるBクラスのメンバー全員で沢村に数学勝負を挑

みます！」

『サモン！！！』

相手の足下から召喚陣が現れ、中から召喚獣が出現する。
西洋風の鎧にレイピア。質は良さそうだが、至って普通の装備だ。

『Ｂクラス　小林要　安藤哲也　小島宏　山形慶介　飯島裕助
　数学　　１７５点　１５９点　１８９点　１６１点　１５１点
』

全員が１５０点越え。Ｂクラスの上位の連中のようだ。
好都合。ここで一気に戦力を削らせてもらおう。

「さっさとコイツを倒して代表を倒しに行くぞ！」

「悪いが、お前らにはここで脱落してもらう。
……下手に手を出したのを後悔するんだな。サモン」

俺の召喚獣が呼び出される。
重い鉄が使われていない機動性重視の歩兵装備を身にまとっていて、
その出で立ちは猛者というよりも雑兵といったものの方に近い。実
際、そういう装備なのだからしょうがないわけだが。
ただ、両手にはパタという武器が握られている。

パタとは刀剣の一種で、カタールに近い構造をしている。
二つの大きな違いは取り付けられている刀剣の長さにある。
カタールは短剣ほどの長さしかないが、パタは長剣ほどのリーチが

ある。
剣としての威力は当然高くなる。
ただし使用難易度が非常に高く、一歩間違えると手首に怪我をさせてしまうこともある。

「かまわねぇ、かかれ！」
召喚獣一匹が飛び込んでくる。
そのまま勢いを利用して縦斬りを繰り出してきた。
召喚獣を横に跳ばせて、切っ先をかわす。
標的を失った剣は勢いも殺せず、そのまま深々と地面へと突き刺さる。

「なっ！？」

背中に回り込んで剣を掲げ、一気に振り下ろす。
刀身を通じて破砕音が腕にまで伝わってくる。
「うわぁぁぁっ」
「小林っ！？」
「バカな！　相手はＦクラスだぞ！」

「一丁上がりッと」
「さて続きを始めましょうか、Ｂクラスの皆さん？」
しばらくして、俺の召喚獣の点数が表示される。
『Ｆクラス　沢村優也　数学１５２点』
「俺より……１点高い……」

「大丈夫だ。きっとあいつは数学が得意なだけだから」
「次は俺がいくぜ！　お前らは先にいってくれ」
一匹の召喚獣が前に出てくる。
他の三人は召喚獣を消し、Ｆクラスに向かって走り出した。
させるか！　俺の目的はお前らの撃破だ。一人たりとも逃がしはしない。
「長谷川先生、Ｆクラス沢村がＢクラス４人に数学勝負を申し込みます！」
「「「なんだと！？」」」
「自滅しようってのか！？」
勝負を申し込まれ、それを受けなかったとき、『敵前逃亡』として無条件で補修室送りになる。
沢村の宣戦布告に、四人は召喚獣の召喚でそれにこたえるしかない。
「くそっ、サモン」
悪態をつきながら召喚獣を呼び出す山形。
足元から召喚陣が現れ、その中から召喚獣が――
――なんてことをやってる暇はないんだ。現れるのを待つだけ面倒。
召喚陣の近くまで移動し、まだ姿が現れきっていない召喚獣の頭を串刺しにする。
ひび割れた兜だけが召喚フィールド上に現れて、消えた。
「ひ、卑怯者ッ！」
「喚くな」
確かに卑怯っちゃ卑怯だが、お前らもたぶん似たようなもんだろ？
だから、
「御託なんか並べていないで、早く補修室へ行って来るんだな」
俺はお前を笑顔で送ってやることにするさ。

「戦死者は補修ッ！」
相変わらずの神出鬼没ぶりで、戦死者を連行していく鉄人こと西村先生。
下校時間を過ぎてからの戦闘だというのに、どうしてここで戦闘が行われていることがわかるのだろうか？　この調子だったら例え深夜で戦闘しようが、戦死すれば颯爽と現れて補修室に連れて行かれそうだ。
「な、なんてやつだ！」
「この野郎ッ！」
「小島っ！？」
激昂した小島の召喚獣が跳びこんでくる。
力任せに、手に持った西洋風の刀を振り込んできた。
……速い。
瞬時に、これは避けられないと判断。
左手の甲を前に押し出し、相手の一撃をガードする。

「……ッ！」
『Ｆクラス　沢村優也　数学１１７点』
殺しきれなかった衝撃が、召喚獣を襲う。
点数差はたったの三十点だが、その三十点が大きい。

「フン、勝負には卑怯もクソもありゃしないんだよ」
余裕であることを装って、敵にプレッシャーをかける。
同時に、空いている右手のパタを西洋鎧の隙間に刺し込む。

「というか、そもそも先に卑怯な手段を使ってきたのは、お前らのほうなんだろ？」
『……ッ！』
「……どういうことですか？　沢村君」

「どうもこうもないですよ。それが――」
「殺せッ」
『おうっ！』
残った三匹の召喚獣が包囲網を作る。
――やっべぇな……。三方向から攻められたら、俺も終わりだな。
それぞれの召喚獣が切っ先を向けて突進してくる。
――間に合え！
剣が召喚獣を捉えようとした、その時。
……召喚獣が目の前から消え去った。
『何が起こったんだ！？』
いきなりの出来事に狼狽えるＢクラス諸君。
――よし、狙い通り！　流石は『証明』の学問！
「召喚フィールドは、私が消しました」
前に進み出て答える長谷川先生。
数学は証明的な学問だ。
非常に理知的で、何より論理的だ。
数学の先生は、そんな性質をもった人であることが多い。
……あくまで多いだけで、省略上等な人もいるけど。
中学校の時の先生はまあ、そんな人だった。
『ここ、わかるでしょ？』の一言に何度やられたかわからん。
おかげさまで数学が大の苦手科目になりましたよ。

特に、この学校を受験した時の数学の点数は酷かった。
一番最初の基本問題だけでなんとか稼いだ１３点だった。
合格者のうちでも最低の点数だったんだろうな。

それでも今、これだけの得点を稼げているのも長谷川さんのおかげだ。
内容が理解できない俺に特別補修をして、つきっきりで指導してくれた。
曰く、自分が授業をして理解できないのはプライドが許さないのだそうだ。

とにかく、そんな人が納得のいかない部分を、そのままにしておく筈がない。
一か八かのハッタリだったけれど、どうやら上手くいったみたいだ。

「それじゃ、皆さんサヨウナラ～」
『おい、待ちやがれ！』
「あっ、沢村君」

フハハハ、この俺に貴様らが追いつけるか！
五十メートル七秒一（至って普通のタイムです）の俊足をなめるなよ！

召喚戦争編　第十話（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございます。
更新遅れてすみません。
レポートや部活などが忙しかったもので。
それではまた次回。

召喚戦争編　第十一話

「うぃーす」

ガラガラと戸を開ける。中には、いつものやつらが待機していた。
肩で息をしながら、生還を伝える。

つーか何で残ってたんだよ。
俺がやられてたら、この教室が包囲されて、それで終わりだったんだぞ？
大丈夫かよ……。

「ほらな、大丈夫だったろ」
「信じられない。だって6対1だよ？」
「楽勝」
「ホントは逃げてきただけ、とか？」
「……乙」
「？　どういう意味？」
「いや、こっちの話」
「？？？」

なんか……もう、話すのもめんどくさくなってきちゃった。
久しぶりの全力疾走で疲れた。

「それじゃあ、沢村が帰ってきたところで
改めて作戦会議を始めるぞ！」

『おう（はい）！！』「……」

「Bクラスはこのまま作戦通りにいけば落とせるとして、
問題はCクラスだ。今のままだと、Bクラス戦直後に宣戦布告されて
連戦という形になってしまう。だが、それは正直辛い」

「そうじゃのう……」
「……無理」

「あ、そうだ。ねぇ、雄二。
沢村ってCクラスとの交渉の直前にトイレに行ってたよね？
どんなことがあったのか知ってるのかな？」
「まぁ、こいつなら大丈夫だ。
頭の造りがお前と違うからな」
「いや、これは頭がいくら良くても無理だよ。ね？　沢村」

「……ごめん、吉井」
「ほらな。沢村ならこれくらいは予想できるさ」
「でも、それは沢村がアレなだけだろうし。あと、僕はバカじゃない
いから」
「いや、おm」
「待て、話がややこしくなる。そして吉井、『アレ』ってなんだ？」

中学で男子校経験もある俺の脳内変換メーカーが
とても『異常なモノ』を叩き出しているので非常に心配なんだが。

「保健室……」
やっぱりか。
「もう、いいや」
「？」

今日は疲れたから、否定するのは明日にしよう。

「それでCクラスが攻めてきそうだから、なんだ？」
吉井にこれ以上追及されないよう、話題を変える。
「ああ、それのことなんだがいい策を思いついたんだ」

「いい策？」
「何なの雄二、それは？」

「それはだな……」
雄二が作戦を説明し始める。

「なるほどそれはおもしろい（棒読み）」
「ワシとしてはあまり面白くない話なんじゃが……」
そりゃそうだ。
「何言ってんのさ秀吉！　最高じゃないか！」
「……（ごしごし）」

そんなにはしゃぐと、ホラ。後ろの女子二人からスゴイ殺気が。

「とにかく、実行は明日だ。今日のところは帰ろう」

そして今日は解散となった。

召喚戦争編　第十一話（後書き）

読んでくださった方々、どうもありがとうございます。

すみません。学校があまりに忙しかったもので
しばらく更新ができませんでした。
ですが、今日で少し落ち着いたので明日からは
しっかりできると思います。

いつの間にかお気に入り登録件数が増えていました！
登録してくださった方々、ありがとうございます！！！

これからも頑張りたいと思いますのでよろしくお願いします！

それではまた次回！

召喚戦争編　第十二話

翌朝、俺たちはCクラスに来ていた。

何のためかって？

もちろんBクラス戦後にCクラスと連戦することを阻止するためさ。

今は、そのために雄二が考えた作戦を実行するところだ。

昨日、説明しそびれた作戦の概要でも話しておこうか。

どんなものかっていうと……

まあ大雑把にいえば、秀吉が姉（木下優子）に擬態して（女装して）Cクラスを挑発する、って感じかな？

ここでポイントなのは、木下がAクラスってところだな。

上手く挑発できればCクラスの矛先はAクラスに向かうだろう。

秀吉と木下が、そっくりな容姿をしてることが幸いしたな。

……多分、それは秀吉にとっては辛いことなんだろうけど。

目の前で今、秀吉が女装の準備をしているが

その顔からは多少なりとも不満の色が見て取れる。

やっぱり男に生まれた以上、女装は嫌なことだよな。

……さっきから明久やFクラスの連中が鼻血を噴き出したり、

ムッツリーニがシャッターを切りまくっているけど

こいつらは秀吉が『男』だってのを認識してないのか？

まったく、情けない。

「沢村、鼻血がたれてるよ？」
……不覚。

「着替えが終わったぞい。ん？　皆どうした？」
秀吉がＦクラスの連中の反応を見て、怪訝そうな顔をする。
ま、そりゃそうだ。
男の着替えを見ても、普通は鼻血なんて噴き出さないもんな。
……普通なら、だけどね。

「沢村、なぜお主は鼻の穴にティッシュを詰め込んでおるのじゃ？」
「いや、それはだな……、あっ、熱中症だよ熱中症。うん熱中症」

暫くこいつらと一緒に生活してきたが、今になってもその『異常性』が理解できない。
というよりも理解してはいけないものの様な気がする……。

鼻血がまた垂れてきた……。ティッシュだティッシュ。

俺は多分、その辺は大丈夫なんだろうが……
問題は姫路だな。
温室育ちのお嬢様には、このＦクラスの毒は荷が重い。
もう暫くしたらやられるだろう。
白であればあるほど、黒には染まりやすいものだし。

まあいいや、それは一旦置いておこう。
今は……Ｃクラス対策だ。
作戦の経過を見守るとしようか。
おっと、ティッシュを代えないと。また垂れてきた。

「じゃあ行ってくるぞい」

坂本との会話を終えた秀吉がCクラスに歩みを進める。

「ただ、あまり期待はせんでくれよ……」
テンションが異常に低い。……無理もないけど。
でも、あの調子だと失敗の確率の方が大きいんじゃないかな？
そもそも、いくら容姿が似ているからって声とか、真似できないものもあるだろ。
あと、胸とかはどうなんだろ？
そう思い、坂本に問い詰めてみるが
『秀吉なら心配はない』の一点張りだった。

ということは木下優子は貧乳。なるほど、それはいいデータだ。

「静かにしなさい、この薄汚い豚ども！！」
えーっと、秀吉の声が姉そっくりだと仮定して――
声はまあまあ綺麗、と。

「アンタ、Aクラスの木下ね？
ちょっと点数がいいからって調子に乗ってるんじゃないわよ！　何の用よ！」
……それは調子に乗ってるとかっていうレベルじゃない。

「私はね、こんな臭くて醜い教室が同じ校内にあるなんて我慢ならないの！
貴方達なんて豚小屋で充分だわ！」
「なっ！言うに事欠いて私達にはFクラスがお似合いですって！？」
豚小屋よりはマシだと思う。……そう思いたい。
あと、今の秀吉の言葉づかいが姉そっくりだったとして――
言葉遣いは乱暴、と。

「手が穢れてしまうから本当は嫌だけど、
今回は特別に貴方達を相応しい教室に送ってあげようかと思うの。
ちょうど試召戦争の準備もしているようだし、覚悟しておきなさい。
近いうちに私達が薄汚い貴方達を始末してあげるから！」

一応突っ込んでおくと……
召喚戦争のルール的にCクラスを豚小屋（仮）のランクまで
落とすには最低3回戦わないといけない。
普通、態々そんなことをするクラスなんていないぞ？

あと、肌が綺麗、と。

すさまじい罵倒の余韻を残し、秀吉は戻ってきた。
「これで良かったかのう？」
秀吉の顔はどこかスッキリとしていた。
「ああ、素晴らしい仕事だった」
雄二が秀吉に労いの声をかける。

「全くだ。いいデータが取れた」
続いて俺も感謝する。
「データ？　なんの話じゃ？」
「まあ、イロイロ」

「Fクラスなんて相手にしてられないわ！　Aクラス戦の準備を始めるわよ！」
Cクラスからは代表のヒステリックな声が聞こえる。
ちょうどいいタイミングだったので、秀吉からの追及は免れた。

「おいおい……Cクラスの代表って、こんなに短絡的なのか？」
「もちろん、それを計算に入れての作戦だったからな。

結構突っ込みどころ満載の挑発だったろ？
それは相手が小山だからこそなんだ。やつは頭に血が上ると冷静な判断ができなくなるからな。
だから挑発の内容は合理性よりもそっちの方を優先させたのさ」
「なるほどな。じゃあこれでCクラスの脅威はなくなったわけだ」
「ああ、Bクラス戦に集中できるな」
「確かにな。あ、そうだ。
召喚戦争って、今日の午前九時からだったよな？」
「ああ、そうだ。今日もよろしく頼むぞ」
「おう」
「点数の補給も忘れずにな」
「わかってるよ。
じゃあ俺は先に教室に戻ってるぞ」

「頑張れよ」
「もちろんさ」

さて、行くか。

あ、小山のデータ……。

召喚戦争編　第十二話（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございます。
え～と、最近部活がヤバイです。キツイです。ツラいです。
どうでもいいですね、はい。

それではまた次回。ノシ

召喚戦争編　第十三話

「……」
俺は今、信じられないものを見ている。
補給テストを受けようと筆箱を開けた瞬間、
目に飛び込んできたのは――――――
折れたシャーペン、ボロボロの消しゴム、
砕けた定規、そして……無残な破片と化した思い出の鉛筆。
「何があったんだ……？」
ちゃんと自分のものはチェックしておくんだった……。
ここ数日帰ってから勉強してなかったからな……。
それにしても、何が起こったんだ？
普通、バックの中に入れたままだって鉛筆が
折れるほどの衝撃は来ないはずだけど……。
「優也、補充テストの準備はできたか？」
後からやってきた雄二が声をかけてきた。
「それが……筆箱の中身が全部壊れちゃってて、
補充テストが受けられないんだ」
「お前、その時あの場所にいたよな！？
……まさか覚えてないのか？」
雄二が驚いたような顔をしてそう言う。
その時？　あの場所？

なんのことだ？

「お前は何の事を言っているんだ？」

「……本当に覚えていないようだな。ったく、めんどくさいが説明してやる。

倒れたせいで記憶喪失になってるかもしれないしな」

そう言って雄二は説明を始める。

雄二が協定に行ってる間にFクラスを襲撃されたこと。

そこで狙われたのが筆記用具であったこと。

襲撃後の教室を見た俺が熱を出して倒れたこと、とか。

……そういえば思い出したよ。

壮絶な吐き気と頭痛、悪寒、そして自分が自分じゃなくなるようなあの感覚。

そして折られた筆記用具の中に混じっていた思い出の鉛筆。

故郷の空気を知っている、最後のモノ。

無残な木屑と化したそれを。

だんだんと怒りがこみ上げてくる。

この企みをくわだてた根本に対する怒りが。

罵倒、批難、嘲笑……そんなものは笑って流してやる。

だがな、人の持ち物には手を出しちゃいけねぇ。

必ずなんらかの思い入れがあるはずだからだ。

だが、それをあいつは破った。
例え神がお前を許しても、俺はお前を許さない。

……絶対ぶっ飛ばしてやる。
お前の思い通りにはさせないぞ……。

「雄二、俺に補充テストは必要ない」
正直、補充テストを受けている時間も惜しい。
「なんだと！？　自殺行為だぞ！」
突然の発言に雄二が驚く。
……当然か。昨日の戦闘で俺は結構な点数を消費してしまったからな。
でも――――――
「それでもかまわない」
どんなリスクを抱えても、絶対にあいつは倒したい。
「おそらく昨日の戦闘で、お前はマークされているはずだ。
今までの様にはいかないんだ。それがわかっているのか？」
もちろん、それも承知の上だ。
おそらく、一度に戦う相手は2人や3人じゃ済まないだろう。
しかも点数も消費している。普通に考えて無事に済む道理はない。
「ああ、わかっている」
……それでも俺は行きたい。
俺だけじゃない、故郷のみんなの気持ちを
踏みにじったアイツを許すわけにはいかない！
「急にどうしたんだ？」
「……」

その言葉に俺は無言で返す。
「……あの鉛筆のことか？」
「！？　……なぜそれを？」
「カマをかけただけさ。まったく、お前も明久もこの手には弱いんだな。
……何があった？　あの鉛筆になにかあるのか？」
探るような目つきで、こちらを見ながら聞いてくる。
嘘をついたら……多分見破られるな。こいつの鋭さは一級品だしな。
だが、話すわけにはいかない。
今はそのことを話すタイミングではないから。
「今は……言えない。でも、時が来たら必ず話す。
だから今は行かせてくれ」
雄二の眼をまっすぐに見据えて、そう言った。
「……わかった、そこまで言うなら行かせてやる」
「ホントか！？　あｒ……」
「だが！　……絶対に戦死するなよ。お前を失ったら、
このクラスは崩れてしまうからな」
「……わかった。必ず生きて、そして勝つ！」
「いい返事だ。行って来い！」
「おう！」

そして戦場へ向かって駆けて行った。

召喚戦争編　第十三話（後書き）

まずは一言。

本当にすいませんでしたっ！！！！？

この間、最低二日に一回は更新するって
宣言したのに早々と破ってしまいました……。
ごめんなさい。

言い訳をさせてもらうと、

寝ちゃったんです……。
帰ってからベッドにダイブしたらそのまま意識を失いました。

そんな感じです。

で、本編の方のコメントですが……

グダグダですね、はい。ホントごめんなさい。
途中ノリで書いたやつが多すぎました。

時間がせめて3時間くらいあれば……
な～んて言ってられないですね。

そんな感じで頑張っていきます。

それとお気に入り登録してくれた方、ありがとうございます！

それではまた次回！

召喚戦争編　第十四話

やっとだな。
少しずつ剣戟の音が大きくなってきた。
現在、戦闘は主にＢクラスから１０メートルほど離れた地点で行われているようだ。
……結構奥に押し込んでいるじゃん。
やるな、Ｆクラス。見直したぜ。
今は少し……いや、かなり押し返されているようだが。

……さて、俺も出るとしよう。
ちょっと戦況が危なっかしそうだし。

「秀吉！　俺も今から戦闘に参加する。よろしく頼むよ」
「優也か！？　助かったわい」
「ああ、現在の戦況はどんな感じだ？」
「まずいのう……。姫路も戦線離脱してしまったし
今、Ｂクラスの勢いを止められる者もおらん。
正直、現状維持がやっとの状況じゃ」
「待て。……姫路が戦線離脱？
まさか彼女が戦死したのか！？」
「いいや、そうではないぞい。
明久の進言で後ろに下げることになったのじゃ。
『体調がすぐれないようだから』とな」
「……」
おかしい。何か違和感を感じる……。
姫路は具合が悪くても、それを悟られまいと努力するはずだ。
明久は明久で、それに気付けるほど敏感な人間でもない。

そういえば、ここへ来るまでに明久とすれ違ったな。
俺は頭に血が上っていたから、声もかける余裕もなかったが、
明久の方からも声をかけてこなかったな。

つまり、あいつも頭に血が上っていたってことか。

姫路戦線離脱・吉井激昂からわかること……

無理だな。これだけじゃあまだわからん。
残念だけど、これは一旦保留しておこう。

「……村、沢村！」
「はっ！？」
秀吉の呼ぶ声で意識が戻った。またかよ……。
考え事するといつもこうなるな。何とかなんないかな？
「どうしたのじゃ？　急にボケっとしおって」
すみません、昔からこうなんです。
「ちょっと、ね。じゃあ俺は戦闘に参加するよ」
「ああ、頼むぞい」

『うおぉぉぉっ！！』
一転して、こちらは怒号飛び交う戦場。
「援軍を頼む！　このままじゃまずい！」
基本的に多人数対１で戦ってきたＦクラスだが、
他の召喚獣はやられてしまったようで、
そこには２匹の召喚獣しか残っていなかった。

「俺らにも頼む！」
こっちは2対1、鍔競り合いをしている。
「無理だ！！　余裕がない！」
「絶対に持ちこたえろ！！　こいつらをBクラスに押し込むまで耐えるんだ！！！」
「Fクラス吉永、戦死！」
「櫻井と福崎もやられたぁぁ！」
「まずいぞ！　右側が……」

「よし！　右に突破口が開いたぞ！」
吉永、櫻井などの戦死によって右方に隙ができてしまった。
「そこから抜けて、本隊と挟み撃ちするんだ！
Fクラスのほとんどはここに集中している！
一網打尽にしてやるんだ！！！」
『うおぉぉぉぉ！』
「誰か本隊とコンタクトを取りに行くんだ！！」

「まずい！　Bクラスの連中が右方からぬけていくぞ！」
「なんだと！？　このままじゃあ……」
「背後まで取られたら、やられちまうぞ！！！」

撤退を行えず、連戦を余儀なくさせられてしまうためである。

「よし！　背後はとった！　これより戦闘態勢に入る！！」
『了解！』
「援軍も到着したぞ！」
中堅部隊15人が援軍で到着した。
本隊とのコンタクトに成功されたようだ。
「皆殺しにするんだ！！」
『おおぉぉぉぉ！！！』

「やばい！　戦死者が続出しているぞ！！」
Ｂクラス所属の召喚獣はＦクラスの召喚獣を
手当たり次第に剣で切り裂いていく。
「まずい、このままじゃ全滅だ！」
「せめて……せめて片方に集中することができれば！」
前後から襲ってくるので、一方の敵に集中できない。

弱者が強者に対抗できるようになるのは、
士気や集中力によるものが大きい。

だからこそ、それを乱された時のダメージはかなり大きいのだ。

士気は落とされ、集中力も乱された
Ｆクラスの前線部隊の運命は、風前の灯であった。

召喚戦争編　第十四話（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございます。

今日は更新できました！
明日も頑張って、更新を目指したいと思います。
（できないかもしれませんけど……）
その時は多分、土曜日更新になると思います。

あ、それとお気に入り登録してくれた方、ありがとうございます！
これからもよろしくお願いします。

それではまた次回！

召喚戦争編　第十五話

「やれ！　連中を皆殺しにするんだ！！
姫路がいない今、俺たちに怖いものなんてないぜ！」
『うおぉぉぉっ！』

……調子に乗ってるな。

その様子を後ろから見ていた沢村が呟く。

士気が上がるのはいいことだが、……あまり上げ過ぎると
破滅することになるぜ？
その士気がいずれ油断となるからな。

さて、そろそろ行くとするか。
みんなを助けねぇとな。
そうしないと、明久の望みが叶わなくなってしまうことにも
つながってしまうわけだし。

「サモン」

先生の召喚フィールドの範囲内に入り、
召喚獣を呼び出すためのキーワードを唱える。

すると魔法陣が現れ、その中から召喚獣が出現してきた。

幸い、Ｂクラスの連中はＦクラス前線部隊の殲滅に
集中しているために気付かれずに済んだな。

さあ、戦闘開始だ。
手始めに、一番近い召喚獣を後ろから一突きにした。
「！？」
無防備な状態で攻撃をくらった召喚獣は、悲鳴を上げる間もなく消え去った。
『誰だ！？』
一突きにされた召喚獣を視界に捉えていた連中が振り向く。
「Ｆクラス所属の沢村優也だ。Ｆクラス前線部隊の応援に来た！」
『沢村だって！？』
俺の声にＦクラスからは歓声、Ｂクラスからは驚愕の声が上がる。
『うおぉぉぉ！！　援軍だぁっ！！』
『なんだって！？　補給テストを受けていたのではなかったのか！？』
『フン、だが慌てることはないさ。あいつの点数は大したことはない』
『ああ、あいつは数学の点数が高いだけだ！　なんたってＦクラスなんだからな！』
『そうそう、今は現国なんだよ。お前はお呼びじゃねぇんだ』
その情報に安心したのか、連中の一人が前に出てくる。
『帰りな。ここはお前みたいな雑魚がやってくる場所じゃねぇんだよ』

ハハハ、とBクラスの戦線からいくらか嘲笑が向けられる。
『いや、それよりも皆で嬲り殺した方が楽しいんじゃねぇか？』
『ああ、そうだな。ちょうど戦力ダウンも狙えるしな』
『じゃあこっち側半分は沢村の撃破、そっち側半分は引き続きFクラスの蹂躙を行うんだ！』
『了解！』

……くそ、もうダメなのか。
沢村が援軍にやってきてくれたにしろ、流石にBクラス複数人相手じゃ厳しい。
多分、沢村は奴らにやられる。１０対１なんて、無理だ。
そのあと、俺たちも。もともと４０近くいたのが、今では２０ちょっと。
……全滅は時間の問題だ。

俺たちが終わったら、全勢力が坂本に向かう。
クラスに残った奴らは、当然こいつらには敵わない。

姫路さんが立ち向かったところで、勝ち目は薄い。
次から次えと群がるこいつらにやられる。
体力がない彼女に、数に耐え抜く力はない。

せっかくDクラスを打ち破って、ここまで来たっていうのに。
ここで勝てば、Aクラスと戦うことができるのに。

俺たちの存在価値を、示すことができるのに。

いくら普段、学校でふざけていたって、俺たちも人間なんだ。
何か思うこともあるし、考えることもある。
バカにされて、悲しくもなる。

ただ、そういう顔を見せたくない。
それだけで今まで頑張ってきた。わざわざ自分の『バカ』を見せつけた。

答えがわかっても答えられないふりを。
提出物は忘れたふりを。
彼女ができないキャラをわざわざ演じて。

親にも、教師にも見放され、居場所を求め続けて、たどり着いたのがそんな場所。

くだらない。くだらないけど、それしかない。

坂本が『Aクラス打倒！』を掲げたとき、無理だ、って思った。
出来るはずがない、って思った。
でも同時に、嬉しくもあった。

バカがエリートに勝つ。

そんな夢みたいなことが俺にもできるかもしれない。
そのことを糧にして、頑張った。

しばらく振りに教科書を読んで、ノートを開いて勉強した。

補給テストも必死に受けた。
戦死して、鬼の補修を受けるときだって真面目にやった。
木下の着替えで、みんなで鼻血を流したのも、なんだか楽しかった。
ああ、これが仲間なのかなって。
でも、その時間も、すぐに終わる。
最下位クラスが負ける、というごくごく自然な結果となって。
俺たちがDクラスに勝てたことはマグレってことにされて、
いつかそこに俺たちがいた、ってことも忘れ去られてしまうのだろうか。
全て、なかったことになってしまうのだろうか。

ダメだ、そんなことは絶対にさせない。
この状況を打破して、Bクラスを倒す。
当たり前の結果では終わらせない。
――必ず

『ぐはぁっ！？』

そんな状況だったからこそ、相対する敵の召喚獣が吹き飛んだことに驚きを隠すことができなかった。

召喚戦争編　第十五話（後書き）

読んでくださった方々、ありがとうございます。

ということでまた次回！

召喚戦争編　第十六話

１、２……――――１０人か。
１０対１となると、どうなんのかな？

『へへっ、もう逃げ場はねぇぞ』
『ああ、逃げても敵前逃亡で負けだ』

普通は無理、って結論に行き付くのだろうか。
そりゃそうか。いくらなんでも十人分の攻撃を受けることはできねぇよな。
喧嘩と一緒だな。

『マジこいつ最低だよな。全く、卑怯な奴だぜ』
『昨日のことだろ？　ま、所詮は《Ｆクラス》だ、ってことだな』

いくら喧嘩が強くても、それなりに慣れてるモンを相手にできるのはせいぜい３、４人が限界だ。

『流石は最底辺』

ましてや、１０人なんて絶対無理だ。

『ま、今から俺たちが粛清してやるんだが。ありがたく思えよ？』

――でも、それは喧嘩であればの話であって、

『今日はどうやって逃げるんだ？　臆病者』

――召喚戦争に当てはまるとは限らない！
速攻。左右の長剣を、敵召喚獣の顔面向けて繰り出す。
その切っ先は、鍔迫り合いをするのを待たずに、頬骨を貫いた。
断末魔の悲鳴。顔に突き刺さった剣を抜く。
同時に、魂が抜けたように召喚獣は膝をつき、塵となって消えた。

一匹目は討ち取った。
――あと2、3匹はぶっ殺してやる！
次の獲物はと、他の召喚獣に目を向ける。
しかし、どれもこちらにサーベルを向けて牽制をはかっていた。

――ちっ、流石に2度は通用しないか
――つーか、威勢が良かった割には警戒してるんだな。
――流石は上位クラス、ってところか。

『てめぇ！　やっぱり卑怯もんだぜ！』
これまた前回の戦闘の反省が利いているのか、今度は単騎ではなく残り9匹全体で攻撃を仕掛けてきた。

「まずいな……。この数、抑えきれないぞ……」

『フン！　今までの戦いで、お前の弱点は把握したんだよ』
『Fクラスのことなんかお見通しだぜ！』
9匹全員が肉薄する。
文系科目で高得点者が多いだけに、どの召喚獣も動きが素早い。

サーベルの向きは変わらない。
どうやら、薙がずに貫くつもりのようだ。
切っ先が近付いて、近付いて……今にも沢村を刺し殺さんとした、
その時――――

『がふっ！？』

先方の召喚獣は地面に叩き付けられた。
地面がひび割れそうなほどの――召喚獣は物体に干渉できないため、
床には何も変化が見られないのだが――力が加えられている。

手にしていたサーベルが根元からへし折られる。
西洋風の鎧兜も、ベコベコと歪みが出現し始め、間もなく破砕した。

身を守っていた鎧が砕かれ、成す術もなくなり、召喚獣はやがて消滅してしまった。

犠牲は一匹だけに収まらない。
先鋒に続いて向かっていった召喚獣たちも、力の渦に呑み込まれていく。

『なんなんだよッ、これはよおおおおおおお！』

それぞれが死に際の一声をあげて寂滅する。

『なっ、なんだお前、何をした！？』
一足遅かったために、渦に巻き込まれずに済んだ連中が騒ぐ。

それぞれが自分の考えられるだけの可能性を模索する。
しかし、答えは見つからない。
考えられることは一つしかないのにも関わらず、だ。
「何を？　決まってんだろ」
沢村は、ゆっくりと自分の召喚獣に右手を掲げさせる。
「それとも、わからなかったのか？　Ｂクラスともあろうものが」
――そこには、キンキンと輝く腕輪がはめられていた。
瞬時、Ｂクラスの面々が凍りつく。
「何が蹂躙だよ豚野郎共。……喧嘩売る相手を間違えたな」
今まで何もなかった空間から、徐々に文字が浮かび上がってきた。
『Ｆクラス　沢村優也　現代国語４８０点』
『Ａクラスでもトップを張れる点数……ッ！』
『バカな！？　奴の武器は数学だけじゃなかったのか！』
「ああ、小島だっけ？　多分ソイツに聞いたんだろうけど――残念」
「俺の武器は数学だけじゃねーんだ」
瞬時に生き残った三匹の真ん中に移動し、腕輪の能力を発動させた。
『重力変化（インフレクション）』
彼らにかかる重力を屈折、体の中心へと向けさせる。

召喚獣はベコベコと潰れて、消え去っていった。
その場に立ち尽くすBクラスのメンバーを尻目に、Fクラスの戦う前線へと移動する。
「さて、と」
「あいつらを助けてやらないと」
自分にかかる重力を進行方向に向ける。
向かう先は、Bクラスの召喚獣。
特に点数の高いやつだ。
ちょうど、今はFクラスの奴と相対していて、近づく俺に気づいていない。
「吹き飛べ……！」
背中に手を当てて、重力をあらぬ方向へ変化させる。
召喚獣はフィールドから飛び出し、操作していたやつは『敵前逃亡』とされて、失格となった。

召喚戦争編　第十六話（後書き）

やっとテストが終わったーっ！！！

最近寝不足なんで文章がグッダグダになっているかもしれません。

というか……なってます、きっと。

ですので誤字、脱字、文法などのミスは指摘していただけるとありがたいです。

それではこれからもまだまだ続きます。

また次回！

召喚戦争編　第一七話

「バカな、４人がかりで一点も削れないなんて……」

ひざまずく４人を無視して、俺は歩を進める。
もとからこいつらなんて眼中にない。

俺の目標はただ一つ。根本を倒すことだ。
それこそが全てだ。

「さて、あいつらの方はどうなってんのかな？」
そう呟き、ＦクラスとＢクラスで行われている戦闘に目を向ける。

「おお、あいつらやるじゃん」
須川率いる前線部隊は少しずつ、Ｂクラスの部隊を押し返していた。
普通だったら太刀打ちできないような相手に善戦を繰り広げている。

先ほどの挟み撃ちで大分人数が減ってしまっていたが、それでもＢクラスの人数を上回っていた。

それもそうだ。相手はこの戦闘に半数程度しか戦力を注ぎこんでいなかったが、こちらはほとんどの戦力を廊下の戦闘に向けている。
もともとの数に違いがありすぎる。
しかも数人、昨日と今日の戦闘で俺が削ってるしな。

うっ、昨日のことを考えると少し頭が痛む。
変な脱力感も感じるし……、……！！

「おい、沢村」

突然後ろから声がかかる。
つんつんした赤髪にゴリラのような野性的な顔。
改めて見るとコイツ凄いな、って思う。どの面下げて街ぶらついてるんだよ？
動物園の檻ん中にでも入れておいた方が自然だよな。

……何考えてんだ？　俺。
なんか急に変な思考が頭の中を廻り始めたんだけど。

「ああ、坂本か。どうした、また何かあったのか？」
「お前に作戦変更の旨を伝えておきたくてな」
作戦変更？　と、沢村は聞き返す。
なぜ今頃？　またアクシデントがあったのか？
それとも、こいつのミス？

「一体なぜ？」
その問いに坂本は『ああ、それはだな……』と切り出して理由を話し始めた。

えっーと……話を要約すると、こうなるのか。

ホモ的欲望をカミングアウトした吉井が自分の願いを叶えるために頑張る、と。
んで姫路が戦線から離脱してるからその分はお前に任せた頑張れよと、そういうわけだな。

まぁ、実際は姫路の為なんだろうが。

「俺たちは大切な友人のささやかな願いを叶えてやるべきだと、そ

う思うんだ」
坂本が芝居がかった口調で訴えるように話す。
「ああ、そうだな。アイツを送り出してやるのは友人としての俺たちの義務だ。
全力を尽くそうじゃないか」
ニヤリと笑って俺もそれに応える。

「で、どうするんだ？」
「簡単さ。Bクラスで適当にあいつらの相手をした後、尻尾を巻いて逃げればいい」
「逃げてどうすんだよ」
「心配いらん。なんらかのタイミングで明久が根本に攻撃を仕掛けることになってる」
「おいおい、やつじゃあ根本の点数の足下にも及ばないぞ？
まさか自滅させるつもりじゃねぇだろうな？」
「明久はあくまで囮だ。本命はムッツリーニさ」
「なるほどな。……ところでやつはどこから入ってくるんだ？」
「窓だ。何の為に室外機をぶっ壊したと思ってるんだ？」
「違う、そっちじゃねぇ。吉井の方さ。クラスの代表って大抵教室の最後方にいるだろ？
土屋が奇襲する時に使うから窓は使えねぇ。入口も俺たちが塞いじまってるし、それじゃあ奇襲にもならねぇ。……一体どこから入ってくるんだろうな？」

「そうだな……壁、だろうか？」
「は？」
「明久は観察処分者だ。他の召喚獣と違って物理干渉ができる。
それを利用するんじゃないか？　まあ、他の方法を思いつかないからってのもあるだろうが。
基本、あいつは『バカ』だからな」

「ふ、ふふ……わはははは――――――
笑いを殺しきれなくなったのか、校舎全体に笑い声が響いた。
まるで天を揺るがすか、とでも云うようなデカイ笑い声が。

あまりに突拍子で奇想天外な答えに驚いた。
誰も考え付かない妙案ってのを期待してた俺だが……
いや、いい意味で裏切られたな。マジで。
確かにソレは誰にも思いつかないわ。

なるほどねぇ……愛する女のために己の身も厭わず突っ込む、か。
いいねぇ、気に入ったぜ。手を貸してやるよ。

「お、おい沢村！？」
瞬間、沢村は目の前から消えていた。
おそらくBクラスの方に向かったんだろう。

「にしても……」

さっきの沢村には違和感があった。
いや、もう違和感ってレベルではないな。ほとんど別人だ。
普段はもうちょっと言葉遣いも丁寧だし、『バカ』のことも今では明久と呼んでいるはずだ。
だがさっきの沢村は今までのあいつとのイメージがかけ離れ過ぎている。

ってことは

「目覚めたってことか」

召喚戦争編　第十八話

「さて、と」
吉井のヤツがBクラスの方にツッコむまでの間、どうしていようか？
多分、アイツはすぐには動き出さないだろう。

あれだけ保身に執着していたアイツが怒りで動いたんだ。
その元凶になったモノは自分の手で解決しようとするだろう。

まあ、その元凶っつーのは根元なんだけどな。
でも根元を自分の手で倒すには点数差が開きすぎているし、なにより親衛隊が邪魔だ。
となると、吉井の方にもいくらか人員――親衛隊にぶつける囮が必要になる。

じゃあ、どこから持ってくるんだろうか？
決まってる。今、補充テストを受けている連中を引っ張っていくはずだ。
召喚戦争やってる連中なんて連れていったら、それだけで奇襲がばれちまう。

「オラァッ！」「ていっ！」「ホァァァ！」
ちょうど俺の目の先で一生懸命戦ってる連中は全員、勝利のために犠牲となるわけだな。
なかなか、えげつないじゃないか。自分以外の全てが囮だなんて。
「援軍がもうすぐやってくる！　それまで耐え抜くんだ！」
必死だな。……それもそうか、負けたら鉄人の拷問補修だし。

――でも、ここであなたたちに残念なお知らせがあります。

援軍は来ません。あなたたちは吉井明久とクラスの勝利の為に犠牲となるのです
さあ、戦争が終わるまでに何人がこの場に立っていることができるのでしょうか？――

なんて言ったら、間違いなく反旗を翻してくるな。ああ、確実にそうなる。
……いや、俺の秘蔵コレクションを囮に使えば、頑張ってくれるかもしれない。

『Ｆクラス側として戦闘しながら、最後まで立っていることの出来たやつに
旬のアイドル、ＢＴＢ４８のマル秘ブロマイドをプレゼントだ！！』

おそらく目の色を変えて頑張ってくれることだろう。
誰一人として生き残ることは出来ないと思うけど。

……冗談はここまでにしておこうか。

どちらにせよ、この場も長くはもたない。
もともとの持ち点が少ない上、さっきのＢクラスの奇襲のせいで、だいぶ削られてしまったからな。
しかも、あのときから援軍は一部隊も来ていない。
まだ耐えられていることが逆に不思議に思えるくらいだ。

ここを突破されてしまうと、誰もＢクラスの進撃を食い止められなくなる。
そうなると、本陣の陥落は避けることができないものになってしまうだろう。
一応、坂本の近くには親衛隊が構えているのだろうが、気休めにし

かならん。
ものの数分も持つまい。

もしかしたら、召喚獣の能力を使えばなんとかなるかもしれない。
でも『俺』はこの召喚獣というモノの操作をしたことがないし、出来たところでBの軍勢を一人で食い止めることができるかどうかは怪しいところだ。

……よし。

やることは決まった。
これ以上、状況を整理する必要はないだろう。

――吉井。ここまで犠牲を払っているんだ。
その奇襲は絶対に成功させるんだぞ！！

召喚戦争編　第十九話

「沢村優也、ここに有り！　死にたいやつからかかってこい！　召喚！」

「「「うおおおお！　”ロキ”の登場だぁぁ！」」」

「”ロキ”、だと？」「あいつがそうだというのか？」「そんなバカな！」

目の前に現れる召喚陣。幾何学的な模様を床に映し出したのち、中から自らの姿形を模した召喚獣が姿を現す。『いつもの』歩兵軽装備に、『いつもの』刀剣パタ。

『俺』がこの装備を使うのは初めてだが、あいつが召喚獣をどうやって動かしていたのか、っつーことは何回か見たことがあるから、なんとなく分かる。『自らを動かさずして、自らを動かすイメージを持つ』。これが召喚獣操作のコツだったはずだ。

召喚獣の腕を少し動かしてみる。肩のまわりでグルグルと回す。

（やりづらいな……）

思っていたよりも難しい。

少しでも意識の対象が召喚獣からずれてしまうと、それだけで動きに精彩を欠いてしまう。

（やはり、そう簡単にはいかないか）

戦闘勝利にはあまり期待できない。

表の方ほど、俺は召喚獣を使った戦いに慣れていないし、点差が開いていたところで

何人も切り伏せることができるほど、多人数との戦闘は甘くない。

せめて能力が使えれば良いのだが……使い方がわからない。

能力行使には個人の特定の感覚を必要とするみたいで、人によって使用することの出来る
ものは異なってくる。もちろん『重力変化（インフレクション）』もその例に漏れることはない。
だから、アイツが使っている能力を今の俺が使うことはできない。

もちろん、俺だけが使える特殊能力ってのもあるのかもしれないが、どんな能力なのかも
未知数だ。もしかしたら著しく点数を消費してしまう能力なのかもしれない。
広範囲にわたる無差別系の攻撃だったときには、味方を巻き込んでしまう怖れもある。
迂闊に使ってしまってはならない。

とはいっても、戦況は正直、あまり良いとは言えない状況にある。
現状、Ｆクラスの部隊長が上手く指示を回すことができているせいか、
なんとかダマしダマしやっていけてるようだが、所詮はその場しのぎの策に過ぎない。
時間が過ぎれば地力の差がどんどん露骨に表れてくるようになるし、
そうなると士気の方にも関わってかなり面倒なことになりそうだ。
あまり甘いことも言っていられない。

だから早いうちに手を打たねばならないだろう。
先の戦闘で示した圧倒的な戦力差と、思うようにいかない戦線の攻略への焦り。
この二つを利用させてもらう！

「Ｆクラスの戦線部隊、後退しろ。敵との接触部分を極力少なくするように、前線の入れ替えを行いながら、ゆるゆると頼むぞ。敵前

逃亡にはならないように気を付けてな」
『了解！』
指示に従って後退していくFクラスのメンバーたち。
それに向かって、俺も歩を進めていく。

「なっ！？　くそ、ちょこまかと鬱陶しい！」
相手に痛打を与えようにも、自分の目の前に出てくる召喚獣が頻繁に入れ替わり、決定的な打撃を与えることができない。加えて、先ほどの沢村との戦闘が今となって利いてきているようだ。

人数だけでいえば、Fクラスの方が優勢だ。
たとえBクラスが挟撃でいくら人員を減らそうとも、この一帯の制圧に全てをかけている
Fクラスと、堅実に動き戦力を温存しているBクラスとでは元が違う。

（さて、そろそろ頃合いか）

これだけ挑発したんだ。そろそろ、この動きをなんとかしようと血気に逸るやつも現れるはず……！
「めんどくせーっ！　もういい、俺がなんとかしてやるぜ！」
「あっ、おい！」

仲間の制止も聞かず、突出して駆けてくる一匹の召喚獣。
Bクラス用とも言えるような西洋風の鎧とレイピア。もはやテンプレートの領域。
製作者はかなり適当な設計をしたのに違いない。
いや、Fの連中の召喚獣は結構個性豊かだし、この辺りは試召戦争の公正化を図るためのことなのかもしれない。

何はともあれ、あちらの方から挨拶しに来てくれたんだ。
こちらも相応のお返しをしないとな。

「沢村、覚悟！」
レイピアを引いて、突きの構えを見せながら突撃してくる。
どうやら標的は俺らしい。

「敵将を狙うのは良い発想だが、……自分の負うリスクのこともよく考えておくんだな」
「なっ！？」
突っ込んできた召喚獣を、殺到しているＦクラスの召喚獣の陰に埋もれさせる。
「あ、あれ……？　召喚獣が動いていない？」
「召喚獣のコントロールには精細な感覚が必要になるな。もちろん、自分の召喚獣を自らの視界内に入れておくことの必要性など、説く必要もないだろう？　そうしないと、召喚獣の動きが外的要因によって変更されてしまったとき、無力化してしまうからだ」
「しまっ……！」
突撃してきた召喚獣の軌道をずらすことなど、造作もないことだ。
ほんの少しでいい。ほんの少し、横から衝撃を加えてやれば、それだけで効果は表れる。

そして、その衝撃を加えるのは俺ではない。
後退しつつ密集していったＦクラスの召喚獣たちだ。

操作者のコントロールを失ってしまった召喚獣の動きは段々と鈍くなっていく。
「チェックメイトだ」
横薙ぎにに一閃。

「敵召喚獣、討ち取った！」
二階廊下に男たちの野太い歓声が響き渡った。

召喚戦争編　第二十話

「僕に協力してくれないか？」
補充テストを受けるためだけに用意された、空き教室。
その扉を開け放った僕が、一番最初にかけた言葉はそれだった。

声に反応して、教室のみんなが一斉に顔を上げてこちらを向く。視界に入ってくる情報が一気に増えた。
全員の表情が目に入ってくる。それは多種多様、十人十色の形を成していた。

ある人は純粋な疑問詞を頭に浮かべており、ある人はバカにしたような目を向けてきている。
また、ある人は目を輝かせながら次の言葉を待ちわびていたり、ある人は興味なさげな顔をして再びテスト用紙に視線を戻してしまったりもしていた。

（ぐっ、みんなに注目されるのって結構緊張するな。バカなことをしているときは全く気にならないのに、こういうときだけは余計に……くそっ）

言葉にして出そうにも、何をどうやって伝えればいいのかわからない。
姫路さんのことをみんなに知られないようにしながら、協力してもらわなくちゃいけない。
難しい。なにをどうすればいいのかわからない。
下手したら姫路さんのことを皆に知られる上に、しかも協力しても

らえないかもしれない。
緊張して上手く舌も廻らない。

だから、

「アキ。急にどうしたの？」
咄嗟に美波からかけられた言葉に、どんなに僕が救われただろう。
あまりにもいつも通り過ぎる言葉と声。
なんだか日常の中にいるような、そんな気さえしてくる。

おそらく、彼女がそれを知ることはないとは思うけれど。
ありがとう、美波。おかげで、いつもの調子を取り戻すことが出来そうだ。

「うん。だから協力してほしいんだ。……根元の野郎をぶっ飛ばすことに」
「そんなの、とっくに協力してるじゃない。だって、私たちが今この補給テストを受けているのも、Bクラスを倒すためなのよ」
「あ、うん。そうなんだけど……」
「坂本か？　坂本が新しい策でも思いついたのか？」
須川君が身を乗り出して、鼻息を荒げて聞いてくる。
「いや、違う。これは僕が考えた作戦だ」
「なんだ。じゃあ僕はパスするよ」
「ウチも」
「なんでっ！？」
「「信用できないから（わ）」」
「そこは信用してよっ！」
「だって、ねえ？」
「ああ。自分の身をわざわざ危険に晒すバカはいないだろ？」
「うっ……だ、大丈夫だからお願いだよ」

「その作戦が成功して、それが僕たちの勝利につながるんだったら良いんだけど」
「アキの作戦に協力しても、けっきょく無駄死して終わりになるだけじゃない？」
「そ、そんなことないよ！　これは勝つための作戦だから……」
「だから、そこが信用できないんじゃないの」
「いや、島田さん。ちょっと待ってくれ」

「吉井君。一つ聞きたいことがある」
「……」
「勝つための作戦だってことは分かった」
「須川っ！？」
「えっ！　じゃあ、協りょ」
「でも、作戦は成功させなければ意味がない。そうだろ？」
「うん、そうだけど……」
「もし失敗したら……いや、失敗したら吉井はどうするんだ？」
「失敗？」
「そう、失敗だ。聞けば、君は『信用してくれ』だの『大丈夫』だの『勝つため』だの、そういう上向きなことしか言っていない。まるで『１００％、成功することは決まっていますよ』とでも言わんばかりに。でも、逆に失敗したとき、君はどうするんだい？」
「失敗したとき……」
「そうだ。夢だけをずっと見ていることは出来ない。時には底さえも直視しなくてはならないんだ」
「底……」
「失敗したときの対応策を考えろ。考えられる最悪のシチュエーションをイメージしろ。自分は、部隊はどう動いていけばいいのか、そのすべてを想像するんだ」
「……」
「それが出来ないのなら、覚悟を示すしかない。何があっても、自

分がみんなを守るんだっていう決意を。それが、将としての責任ってやつだ」
「僕は」
「みんなを守る力もなければ、自信もない。失敗したときにうまく対応できるかどうかもわからない」
「ああ」
「だから、絶対に失敗はしない。必ず成功させてみせる。この身に賭けても、必ず！」
「ということらしいぞ。みんなはどうするんだ？」
ハッ！？　マ、マズイ。みんなの前だってことを忘れてた！
こ、こんな恥ずかしいセリフなんか言っちゃったら、中二病認定を受けてしまうっ！
バカで観察処分者で、しかも中二病な男の子。
救いようがないじゃないか……。
ああ、さよなら僕のウハハな学園生活よ。
「っしゃーッ！　俄然やる気が出てきたぜェ」
「着いていくぜ、吉井隊長」
「俺がいないと危なっかしいからな」
「へ～、アンタもなかなかカッコいいこと言うじゃない！　ウチも一肌脱ぐわ！」
あ、あれ？　もっとキツイ反応が返ってくると思ったんだけど。
なんか逆に雰囲気がよくなってる気がする。
「結構いいもんだろ？」
横にいる須川君が口を開く。

「部下に信頼される将の気持ちは」
「……うん」
須川君、思ったよりも良い人だったみたいだ。
船越先生の件で、須川君のことを誤解していた。
そういえば、Dクラス戦の時にも僕が美波にやられそうになったときも助けてくれたのは須川君だったし、根は優しいやつなのかな。

「よし、そうと決まれば進軍だ！　Bクラスの奴らに目にもの見せてやろうぜ！」
補給テストの教室に猛りの叫び声が響きわたる。

ちょうど、前線部隊の歓声と重なり、お互いの声をかき消し合った。
Bクラスへ届くのは、たった一つの声のうねり。

ゆえに、彼らが認識できたのはただ一つの事象のみ。
大きな光の裏にチラつく小さな影に気づくことなく終わってしまう。
それは焦りによるものだったのか、果たして油断によるものだったのか。

ただ、それはBクラスにとっての命取りとなる。

戦況は大きく傾きつつあった。

召喚戦争編　第二十一話

「ふむ。あっちもどうにかなったようだな」
遠くの教室からあげられる声に反応した俺は、吉井が他の全員を説得を説得することに成功したことを確信する。この戦いにも終わりが見えてきた。

でもその終わりを、俺たちの勝利で終わらせるためには、もう少しの辛抱と、気合が必要だ。
――もう一段階、要る。

「どうした！　もう向かってくるやつはいないのか！？」
パタの切っ先を、目の前で固まっている連中へと向ける。
出来る限りの威圧をするんだ。少しでもあいつらが奇襲をかけるための時間をここで稼ぐんだ！

しばらく硬直するBクラス。
単身で突っ込めば何らかの対策を練られ、潰される。
かといって集団で突っ込めば、あの能力を使われて全滅してしまう。

この距離だ。こっちが突っ込んでいる間に、Fクラスの連中は後退するだろう。
巻き添えは狙えない。能力行使による点数消費程度しか狙えないだろう。
それでも、ここでボーっと突っ立っているのは時間の無駄にしかならない。

援軍を呼んで人海戦術を行って弱体化させるか。
それとも――。

（よし、Ｂクラスめ。いい感じに悩んでいるな）
連中は表の方の能力を知っている。武器も鎧も、操作が並はずれて上手いことも。
もちろん『重力変化（インフレクション）』のことだってその例には漏れない。
そして、その能力がどれだけ恐ろしいものかどうかは身をもって体験しているはずだ。

だから俺を恐れる。同一人物に見えるソレを奴らは恐れる。
『単身で突っ込んでも、軽くいなされて倒される』と思い込んでしまう。

保身が何より大切になる戦場では万が一の出来事が命取りとなる。
アイツらは多分、それをよくわかっているのだろう。かなり動きが慎重だ。
だからこそ、見えないものもあるのだろうけど。

「俺が行こう」
ふと聞こえる、低く澄んだ声。
底冷えするような冷たさが滲み出ていて――

ヒュンヒュン

「なっ！？」
突然、剣が降ってくる。なんとか右へと召喚獣を動かし、切っ先をなんとか避けた。
「なんだ？　今のは一体……」

「まあまあ、そうビックリすることもないでしょうよ。今のはただのご挨拶です」
そう言って一歩前へと歩み出てきたのは金髪の少年。
足元には小さくデフォルメされた、一匹の召喚獣。
黒色のストレートジャケットに身を包み、両ポケットに両手を突っ込みながら佇んでいる。
「あなたが、あの有名な”ロキ”なのだそうですね。是非お手合わせしたいものです」

金髪の召喚獣がポケットに突っ込んでいた右手を上げる。
本当に軽く、ひょっいっと挙げられた右手。その周りの空間が、グニャリと歪む。
「僕は君の能力を知っている。でも、君は僕の能力を知らない。これじゃあ不公平だ」
口元を綻ばせながらそう言う少年は、
「だから、僕も手の内を晒すことにしよう」
なんだか、とても不気味な存在に見えた。

声の終わりとともに現れる、ありとあらゆる武器。いや、凶器というべきか。
『武器』のような理性的な印象は、目の前のこれらから一切感じられない。
ただ其処に或るのは、殺意に満ちた明らかな狂気。
だってほら、目の前に浮かんでいるのは、
斧棍鉈鎌鎖暗器鉤銃矛錘弓弩鞭簡剣鏈抓鉞戈戟盾槍扠……――――
――紛れもない化け物、なのだから。

背中に走る戦慄。遅れて、相手の点数が表示されていく。
『Ｆクラス　葛生隆（くずも）　古文４３２点』

『４００点、越え……』
後ろで構えるＦクラスの連中から、そんな呟きが漏れ出す。
彼らは上空に浮かぶ鉄の塊と紛れもない猛者の証、腕輪へと。
畏怖に満ちた眼差しを向けていた。

そして、この俺も。
目の前で浮かぶ信じられない光景に、心を奪われていた。
今、挙げられた右手を下されてしまえば、何の抵抗も出来ずに体を貫かれてしまうだろう。
なにも出来ずに。

――ナニモデキズニ？
――キエルノカ。オレハ、ココデ？　コンナトコロデ？

ドクン

心臓が大きく鼓動をうつ。幻聴かもしれない。
耳元まで聞こえる心臓の音なんて、聞いたことがない。
存在するのか、そんなものは。
存在するみたいだ、そんなものが。

だって、俺の耳まで届いているこの音は。
紛れもない、俺の――。

「行くよ」
無慈悲にも告げられる宣告。

それまで不気味なほど静かに静止していた兵器が、激流のようにＦクラスを目がけて押し寄せる。

召喚戦争編　第二十二話

『ぐぁぁ……』
あちらこちらから悲鳴というか叫びというか、そんな感じの声が聞こえてくる。
ふと周りを見渡してみると、ハリネズミのようになった召喚獣しか目に入らないので、少し困った。どこかに召喚獣の操作者がいるはずなんだけど、どこにも見当たらない。
みんな、どこへ行ったのだろうか？

もしかしてサボってんのか？　それは流石にダメだろ。全くしょうがない奴らだ。
俺がなんとかするしかないじゃないか。
フン、そうだな。強者が弱者を守るのは一種の権利であり、義務だ。
みんなが戻ってくるまでは俺が――。

アレ？　おかしいな。召喚獣が動かないぞ？
システムの故障か？　……困ったな、メンテナンスはしっかりしてくれないと。

そういえば俺の召喚獣って、あんな形してたかな？
多分していなかったような気がする。
うん、そんなはずはない。じゃあ、何でだろう？
なんで俺の召喚獣に。

……あんな、たくさん――。

「……他愛もありませんね。行きましょう」

後ろを振り返り、床に跪く沢村を嘲る。さみしそうな目をする葛生。かぶりを振って、両手を制服の両ポケットに突っ込み、目を閉じる。

「お、おい葛生！　いいのか？　あいつに止めを刺さなくても」

Ｂクラスの一人が焦ったように出てくる。

後ろで控えていた人達も『そうだそうだ』と声を荒げて、処断を求める。

が、葛生はそれに取り合うこともなく

「止めを刺す価値もありません。放っておいてください」

どこまでも冷徹な声で淡々と答える。

聞いているものを震え上がらせるような、底冷えする響き。

「だ、だが」

いくらか勢いは削りとられたものの、自らのＢクラスとしてのプライドを傷つけた沢村には強い恨みを持っているのか、まだ沢村にとどめを刺すことを求めようとしている。

葛生はため息をつく。

「大丈夫、あれだけの数を使って捻じ込んだんです。消滅は時間の問題でしょう」

「それでも」

反論が出る前に抑え込む。

「もし個人的に用があるのだったら、それは後回しにしてください。今は敵の代表を討ち取るのが先です。……根本君の策は気に入りませんが、姫路さんを警戒しなくてもよくなったぶん、役には立ちました。正直、胸クソ悪いですけど背に腹は代えられませんね。行きましょう」

「あ、ああ」

葛生はまた、Ｂクラスの集団の中に姿をくらませて、そのままＦクラスの本拠地へと向かう。

「”ロキ”、ですか。……期待外れでした」

葛生が口からわずかに漏らした独り言は、誰の耳にも入ることはない。
串刺しになった召喚獣と膝を折った召喚者だけを残して、彼らはFクラスの中枢を叩き潰しに向かう。
Bクラスの勝利は目前である、と意気揚々に教室へと駆けていった。

召喚戦争編　第二十二話（後書き）

最近、部活が忙しいですね。
パソコンに触ることすら許されない日々が結構続いております。
主に僕の体力がないせいで。

たぶん更新間隔は長くなるとは思いますが、
どうか僕のワガママにお付き合いいただけるよう
よろしくお願いします。

それでは、また。

召喚戦争編　第二十三話

ああ、俺のせいだ。俺のせいで、Ｆクラスは負ける。
この場所を守れなかったばかりに。
この廊下に召喚獣の血をぶちまけてしまったばっかりに。
――俺たちは、負ける。

予想しなかった。予想できなかった。
まさかＢクラスにもそんなイレギュラーがいたなんて。
そんなことにも気付けなかったなんて。
どこのクラスにも、イレギュラーは絶対にあるはずなのに。
ないはずがないのに。
そんな可能性も切り捨ててしまった自分が恨めしい。
バカだった。能無しだった。
どれだけ皆がこの戦いに賭けていたか、俺も知らなかったわけじゃ
あなかろうに。
身の回りのものまで巻き込んで、それでも戦い続けたっていうのに。
負ける。
――俺のせいで。俺が不甲斐なかったせいで。

きっと代表は知らない。
Ｂクラスにも化物がいるっていうことを。
きっと代表は知らない。
もう俺たちに勝ち目はないってことを。

――負ける。
代表はもう逃げられない。姫路が戦力にならない今、あいつに勝て
る奴は誰もいない。

……すまねぇ沢村。
しゃしゃり出てきちまったが、結局お前の力になることは出来なかったよ。
ああ、情けねぇ。またお前の体に、恥を上塗りする羽目になっちまったようだぜ。
――やっちまったなぁ。

召喚フィールドが消える。
ひび割れた鎧と肉を穿つ凶器を身に纏いながら、召喚獣も共に消えていく。
点数はまだ残っていた。
わずかに一桁だけだが、残っていた。

それは無用の長物。
いや、長物とすら云えないものかもしれない。

そんなのどっちだっていい。
どうせ俺たちはここで負けるのだ。

点数が残っていようといまいと関係がない。
……くっそ、また俺は足を引っ張っちまったなぁ。

目から汗が出てきやがるぜ……。
すまねぇ、みんな。そしてゴメン、沢村。
俺って足を引っ張ってばっかだなぁ。

しばらく床っばかりを見つめていたが、ふとそこに影ができたことに気付く。
顔を上げるのと同時に声がかかった。
「こんなところで何やってんだ？　お前」

「だ、代表！？」
なんでこんなところに……あっ、いけね。
ゴシゴシと目を擦って、バカ野郎これは汗だ、と小さく自分に言い訳するように呟く。
そして誤魔化すようにして言った。
「教室にいるんじゃなかったのか？」
「はぁ？　そんなバカなことをするわけがないだろう」
代表は一瞬、眉を顰める。
「Ｂクラスはまだ戦力をある程度、温存しているんだ。沢村がいくらか削ったにせよ、残ったやつらで殺到されたら終わりじゃないか」
あたかも当然であるかのように話す代表。
唖然とした。……お前、そんなことまで考えてるんだな。
「当たり前だろう」
心を読まれた……だと？
「お前は表情に出やすいんだよ。それに、いちいち驚いた顔なんかするな。どうせ大した考えじゃあないんだからな。沢村でも思いつくぞ？　こんなもん」
「アイツ、そんなに頭良かったかなあ？」
昔は、というか中学校時代は普通にバカだったような気がするんだが。
少なくとも俺が見てきた限りでは、沢村は至極まっとうなバカだった。
「お前がアイツ以上にバカなだけだ。ったく、同じ体を共有していても中身は全くの別物なんだな」
「それは一年前にも言っただろ？」
「呆れかえってるだけだ。改めて、な」
「……うっせえ。倒置表現なんか使って強調してんじゃねえぞ、こら」
「おお、そんな難しい文法用語を知ってるなんて思わなかったぞ。意外と頭が良いんだな、お前」

「バカにしてんのか？」
「それさえ分かれば十分だ。明久はバカにされたことすら分からなかったりするからな」
「……アイツと比べられるとは心外だ」
「明久と同レベルかそれ以下のバカだと思ってたが、これは予想外だぞ」
独り言のようにブツブツ呟いているが、思いっきりこちらの耳に入ってきている。
「なんてワザとらしい、独り言のように見せかけた暴言なんだコノヤロウ。はり倒すぞ」
ビリビリと電光を弾き出すように、目つきを鋭くしてみるが代表はどこ吹く風。
もっと電光を強くしてみる。変わらなかった。
所詮は脳内設定だもんな。
「さて、と。元気も出たようだし本題に入るぞ、田沢秀樹」
「！」
代表はすぅ、と目を細めて真剣な顔をする。
さっきまで明後日の方向を向きながら作っていたアホッ面も、なりを潜める。

ああ、わかってるさ。
代表が『お前』じゃない、本名の方で俺を呼んだんだ。
それは沢村優也の中に存在する一人格としてではない、固有の存在として呼ぶということ。
一年前と同じ。
危機的状況下における対策。
普段からバカやってるこいつが、神童としての能力を使うサイン。
俺はやはり前と同じように、――コイツの言うことに従うしかない。

「ああ、そんなに強張らないでくれ。今回、お前に頼むことは一つだけだ」
目の前に出された人差し指を見つめて、一つしばたく。
沈黙を以て、二言目を促す。
「そしてこれは、お前にしか出来ない」
そう言う代表はとても神妙な顔つきをしていて、なんだか俺は武者震いをしてしまう。
「今から補給テストを受けろ。そうだな、五分くらいで終わらせてくれ」
それは無理だろ。
とか頭の片隅で思いつつも、それをここで言ってしまうのは雰囲気を台無しにしてしまうような気がしたので、とりあえず黙っていることにした。
さすがは空気が読める子。偉いぞ、俺。
昂ぶる心はそのままに、どこか頭の冷えた部分で自己分析する。
……我ながらアホなことをやっているな。

「五分経ったらBクラスの教室の前に立て。……扉は閉まっているはずだ。間違っても、絶対に開けるな。そして、中にいるやつにお前がそこにいることを悟られるな」
真面目な面持ちで頷いてみる。
「――そこで葛生と戦ってくれ」
「な……っ！？」
「『勝て』とは言わない。負けなければそれでいい」
「む……ぅ……」
「俺たちはまだ負けていない。だが、何もしなければ負けてしまうことも事実だ。
いいか。俺たちの勝利は、お前にかかっているんだ」
「……それにしたって」
「やるもやらんもお前次第だ。やらなきゃ負けるし、やっても失敗

すれば負ける。荷が重いというならやらなければいいし、やるんだったらやってみろ」
「……」
「ま、どうせだったら、やるだけやって足掻いて負けた方が良くはないか？」

「せっかく尊大な渾名なんて貰ってるんだ。ここで一発ブチかまして、Bクラスの奴らをアッと驚かせてみろよ」
代表が振り向きざまに言った言葉に、俺は何も言い返すことが出来なかった。

召喚戦争編　第二十四話

――補給教室にて

五分、か。
たったそれだけの時間しか、テストを受けることは許されない。
何点取ることが出来るだろうか。
三桁もいかないかもしれない。……うん、多分いかない。絶対いかない。
頑張ってみたところで、せいぜい取れるのは四十点くらいだと思う。
そもそも俺はあまり頭が良い方の人間ではないし、沢村と違って頑張って勉強してきたタイプでもない。
努力も出来ない凡才型。ホント、情けない。

こんな時になってようやく、勉強すれば良かったなんて思う。
こうも分からない問題に立て続けに直面すると、なんだか凄く惨めな気分になる。
ああ、ホント俺って役に立たないんだなぁ。
せめて、沢村が勉強しているときくらい、俺も目を覚まして一緒に教科書でも見ているんだった。

シャープペンシルをガリガリと動かしながら、そんなことを考えてみる。
やっているのは数学の問題。机を向け合わせて、一対一で長谷川先生に採点してもらっている。
シャッ、シャッ、という斜線を引っ張る音がたくさん聞こえてくるのは嘘だと思いたい。
……ああ、長谷川先生は普通は丸で囲むところを斜線で印を付ける先生なんだろうな。

うん、そうだ。きっとそう。間違いないはず俺はそう信じてるぞ。
採点が終わった先生の目つきが怪訝そうな感じになっているのはきっと気のせい。
さっきの答案に丸が三個しかついてなかったなんて、俺は一切見てない。見えない。

無機質な音が教室に響く。ペンが机を叩いてトントンと音を響かせる。
鉛が紙越しに机と擦れる感触が、指に伝わってくる。
久々に感じる感覚。しばらくやっていなかったせいか、これが案外心地良い。

勉強は嫌いだけど、シャープペンシルを動かすことは意外と好きかも。
ペンだこに上手くハマらないペンを持ち直しながら、ふと思う。

「……沢村君」
唐突に長谷川先生が口を開く。
「あ、はい。なんでしょうか？」
なんだ？　成績か？　成績が悪くなりましたねどうしたの、ですか？
バカで悪かったな！
ん？　いやいや頭を冷やせ俺。
成績がどうのこうのっていう話だったら、こんな変な表情にはならないはずだ。
もっと違う、もっと違和感を感じる何かがあるはずだ。

考えろ！　考えるんだ、俺……！
ハッ！　それとも、あなた沢村君じゃあありませんね、か？

いやいや、冷静になって考えるんだ。
人格が入れ替わっているなんて、そんなオカルトチックなこと一般人に分かるはずがないじゃないか。
ハハハ、俺はなにに焦っていたんだろう。……アッ！

そうだ。ここは召喚獣なんていう俺なんかよりももっと非現実的なものが存在しているじゃないか。ファンタジー成分高めの外見をしているとはいえ、観察処分者みたいにこの現実世界に実体化させて存在させているケースなんか特に俺なんかよりずっと有り得ない存在なわけで以下略。

まさか長谷川先生、先生というのは仮の姿でその実、超能力者だったりするんじゃないか？

長谷川先生の人差し指がこちらへと向けられる。

ああ、やめて！　俺はまだ生きていたいんです！　やりたいことがあるんです！
だからストップ！　そこからビームなんか出されたら僕、困っちゃいます。

「それ、どうしたんですか？」
「へ？」
指し示していたのは額まで持ち上げていたシャープペンシル。
決して、除霊的なことをしようと頭を狙っていたわけではなかった。

ああ、びっくりした。そうだよな、そんな簡単にバレるわけがないもんな。
平常心平常心。深呼吸深呼吸。
「すぅ、はぁ～」

「……？」

少し落ち着きを取り戻したところで、改めて指し示されていたものに気付く。

いつも沢村が使っていたものでない、学校支給のシャープペンシル。

「ああ、これですか」

召喚戦争編　第二十四話（後書き）

……眠い

召喚戦争編　第二十五話

「いつも使っていた、あのシャープペンシルはどうしたんですか？」
「ああ、アレですか」
沢村がいつも大事に使っていた筆記用具。
アイツが何かを勉強するときに、アレ以外のペンを使ったのを見たことがない。
もちろん、色を使う時なんかは市販のボールペンを使っていたが、それでもあの拘りようは半端ではなかった。それ以外の鉛筆を持とうともしなかったのだから。

長谷川先生はまたも口を開く。
「時々、私のところに質問したり補修をしに来たりしていましたが、いつもあのペンを使っていたように思います」
「そうですね」
それはもう、異常なほどだったな。
「あんなボロボロになるまで使い込んで、使いづらいはずなのに、私が勧めても交換しようとはしませんでした。……なにか思い入れがあるのでしょう？」
「……」
アイツにとっては、大事なものなんだろうな。
俺からは何も言うことが出来ないけれど。
「どうして、今日に限って持ってきていないのですか？」
「それは――、」
壊されたのですよ、と。
そんな僅かな一言を言おうとした瞬間に、
――ドクン

変に心臓が跳ね上がる。
血圧が上がって、動悸が激しくなる。

（同じ肉体を共有することの弊害か。……沢村のやつ、過剰に反応してやがる）
底の方に沈んでいる意識から、感情の波が襲いかかってくる。

――ドクンドクン

絶叫したくなるほどの、負を内包した波。
激流のように激しいわけでも、威力があるわけでもない。
とても穏やかで、緩やかで、そして不自然なほどに静かなだけだ。

弱々しく、脆い。何かに象ることもままならぬほどの。
無形の何かが胸の中で蠢いている。
よく分からない。何が自分を蝕んでいるのか、形が掴めない。

気持ち悪い。
この得体の知れなさが、さらに身の不快感を増幅させる。

テストの重圧と不快感が合わさって、テストの文字を見ていられなくなる。
はたと時間に制限があることに気づいて、気を休めることもかねて、壁にかかったアナログな時計を見た。テストを受けてから、三分が過ぎていた。

約束の時間まであと、二分。

冷静になって考えてみれば、こんなところで水を売っているヒマなどなかったのではないか。
たったの五分である程度の点数を取りにいかなければならない、この状況下で。
長谷川先生と呑気に会話なんかをしているのは、
おかしいんじゃないだろうか。

そう、おかしい。
間違いなくおかしい。今はテストに集中しなくてはいけない時間のはずだ。

でも、大丈夫だ。今からでも持ち直せば、なんとかなる。
まだ五分の三しか過ぎていないのだ。
頑張れば、今の二倍近い点数を取ることが出来る。

やるしかない。
長谷川先生を無視してでも、今はテストに集中するんだ。
今度は、――今度こそ、失敗はしない。許されない。

いま出来る、最高のことをやらないと。

理性はそう訴える。俺もそう考えている。
でも、どうしてだろう？
どうしても、この感情に抗うことが出来ない。

口が、開いてしまう。

「折られたんです」
「折られた？　誰に？」

「Bクラスの根本君です」

口を突いてポンポンと言葉が出てくる。
よくもまあ、ぬけぬけとこんなことが言えるものだ。
本当に悲しがっているのかも疑わしくなってしまう。

吐き出された言葉に違和感を感じる。
いくらなんでも、この台詞は軽すぎだ。

この感情が沢村のものだってことはおそらく間違いない。
俺がこんな黒い感情を持つことは――少なくともこの場合では、ないだろうから。
じゃあ俺の口から出てきた言葉は一体なんだろうか。

「Bクラス？　彼らは貴方たちと試験戦争をしているじゃないですか。そもそも教室に入られること自体有り得ないハズです」
「僕たちもそう思っていたんです。そんなことは起こり得ないだろうと。
根本はその隙を突いてきました」

なんだ？　違うことを考えているのに、勝手に言葉が出てくる。

「戦争中、彼は条約の申し入れをしてきたんです。午後の四時から一切の戦争行為を禁止しよう、という内容でした」
「……」
「戦力差のある2クラスです。代表と親衛隊以外の戦闘員は全員、教室へと通じる廊下の封鎖を行うために出払っていました」
長谷川先生は黙っている。
「そこに、こちら側にも都合の良い条約を申し入れてきたんです。もちろん、代表は応じました」

手に持ったペンを置いて、姿勢を正す。
「彼らの目的は、こちらの点数補給を遅らせることだったと思われます。おそらく他意はないはずです。しかし、二度と元に戻らないことをしたのも事実」
「……まさか、Ｂクラスと君が戦闘したあの時」
「そうです。Ｃクラスで待ち伏せしていたのに、そこにノコノコと僕たちが現れたのは」
「『一切』の戦争行為を禁じる、という条約を利用したのですね」
コクリ、と首が縦に振られる。
長谷川先生は納得したように、何度も何度も頷いて、そして唸った。

その様子を見て、二つの感情が生まれる。
話し終えたという達成感と、時間を無駄にしたことへの後悔。

そしてどちらかといえば、後悔する感情の方が大きい。
達成感といっても、やはりそれは沢村の持った感情なわけで、俺の感じているそれではない。
いくら同じ体を共有していたところで、最初から自分が持ったものよりも大きいものとなるはずはなかった。

やってしまったという後悔が胸の中にうずまく。

ポケットの中から鋭い振動がふとももまで伝わってくる。
試験前に設定しておいたブザーだ。
音ではなく、振動がでてきたのは沢村は携帯をいつもマナーモードに設定していたからだった。

気が重い。
こんな点数で四百点越えの化け物を足止めできるわけがない。
対峙してみたところで、簡単にやられてしまうだろうし、そうなれ

ば俺たちの
クラスの敗北は必至になってしまう。

まただ。
俺はまた、あいつらの足を引っ張ってしまった。

ゴメン、沢村。
あのシャープペンシルがどれだけお前にとって大切なものだったかは知らないけれど、
その弔いをすることは多分できない。

……でも。
ペンの折れた映像がフラッシュバックする。

あがけるだけあがいてみようと思う。
少しでもBのやつらを苦しませられるように。
僅かでも根本のやつに恐怖を味わせることができるように。

俺なりに全力を尽くしてみようと思う。
自分にできることなんて、もうそれぐらいしか残されていないのだから。

椅子から立ち上がって、扉を勢いよく開ける。
最後の戦場へと、彼は駆け出した。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8516n/

バカと俺たちと召喚獣

2011年11月13日23時07分発行